

垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)

県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 後々迫A遺跡

(平成8年度調査)



垂水市立図書館



110492097

1999年3月

鹿児島県垂水市教育委員会



土器溜り(第1地点)検出状況



土器溜り



遗物集合写真



出土遺物 211

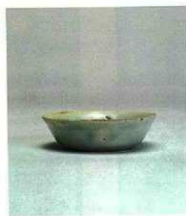


青磁碗

275

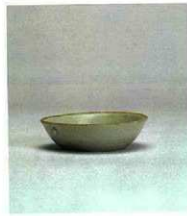


276



白磁皿

277



278





土器溜り(第I地点)検出状況



土器溜り(第IV地点)出土状況



ブロック状に検出した土器溜り



ブロック状に検出した土器溜り



土坑



溝



遺物出土状況



遺物出土状況



作業風景



作業風景

## 序 文

大隅半島の北西部に位置する垂水市は、眼前に鹿児島湾の美しい海岸線を望み、背後には手つかずの自然が残る高隅の山々が連なっています。このように美しい自然に育まれた本市においては、昔から多くの人々が生活を営み、文化を育んでおり、多くの有形・無形の文化財が残されています。

本報告書は、旧J R大隅線跡地に所在する後ヶ迫A遺跡において実施された、県営農免農道整備事業垂水南地区に伴う埋蔵文化財発掘調査を、国・県の補助事業として実施したものを記録としてまとめたものです。後ヶ迫A遺跡からは、多量の古墳時代の土器が出土しました。その器種は多種多様にわたるものであり、南九州における古墳時代の土器研究において非常に重要な資料となるものです。このように重要な資料である本報告書が、市民をはじめ広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご指導・ご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島大学をはじめとする各研究機関、発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位に心から敬意を表します。

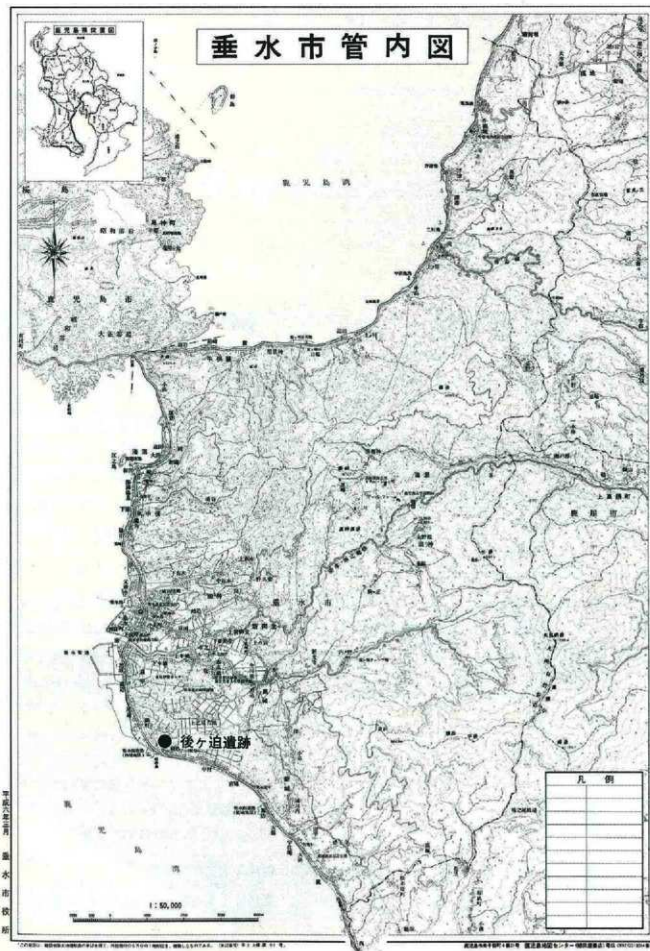
平成11年3月

垂水市教育委員会

教育長 川井田 稔

第1表 報告書抄録

ふりがな	うしろがきこいせき						
書名	後ヶ迫A遺跡						
副書名	県営農免農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	3						
編著者名	綿飼一伸、羽生文彦						
編集機関	垂水市教育委員会						
所在地	〒891-2125 鹿児島県垂水市市旭町61-2 TEL 0994-32-0224						
発行年月日	1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 〰〰〰	東経 〰〰〰	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
うしろがきこいせき 後ヶ迫A遺跡	鹿児島県 垂水市 柊原 新生	462144 11-5	31° 30' 25"	130° 30' 10"	1996.7.22 ? 1996.10.18 (100日)	2,700	県営農免農道 整備事業 垂水南1期地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
後ヶ迫A遺跡		古墳時代  中・近世	土器溜まり4基		・成川式土器 ・須恵器 ・土師器 ・青磁碗 ・白磁皿		



付図 後ヶ迫A遺跡の位置

## 例 言

- 1 本報告書は、平成8年度に垂水市教育委員会が行った農免農道整備事業に伴う後ヶ迫A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理作業中は鹿児島考古学会会長河口直徳氏、鹿児島大学教授上村俊雄氏、同助教授本田道輝氏、同助手の中村直子氏、同助手大西智和氏の指導を受けた。
- 3 本書に用いたレベル数は絶対海拔高度である。
- 4 本書の遺物番号は通し番号を用い、図板中の番号も一致する。
- 5 発掘調査ならびに整理作業における出土遺構・遺物の測量・実測・製図・写真撮影等は鞆岡・羽生が行った。
- 6 本書の執筆担当は以下のとおりである。  
第Ⅱ章  
鞆岡一伸  
第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章  
羽生文彦
- 7 本書の編集は鞆岡・羽生が行った。
- 8 本遺跡の出土遺物は垂水市教育委員会が保管・展示するものである。

## 本文目次

序 文	
例 言	
目 次	
第Ⅰ章 調査の経緯	
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 地形概説	3
第2節 地質概説	3
第3節 歴史概説と周辺の遺跡	3
第Ⅲ章 発掘調査	
第1節 調査の概要	7
第2節 層序	7
第3節 古墳時代の遺構	12
第4節 出土遺物	16
第Ⅳ章 まとめにかえて	81

## 挿 図 目 次

付 図 後ヶ迫A遺跡の位置	
第1図 垂水の地質概略	4
第2図 周辺の遺跡	5
第3図 後ヶ迫A遺跡 調査区内土層断面	8
第4図 後ヶ迫A遺跡 調査地域及びグリッド図	9, 10
第5図 IV層上面の地形と遺構配置図	11
第6図 土坑出土状況	14
第7図 溝検出状況	15
第8図 出土遺物実測図1 (甕形土器Ⅰa類)	18
第9図 出土遺物実測図2 (甕形土器Ⅰb類)	19
第10図 出土遺物実測図3 (甕形土器Ⅰb類、Ⅰc類)	20
第11図 出土遺物実測図4 (甕形土器Ⅰc類)	21
第12図 出土遺物実測図5 (甕形土器Ⅰc類、Ⅰd類、Ⅱa類、Ⅱb類、Ⅱc類)	22



第13図	出土遺物実測図6 (甕形土器Ⅱc類、Ⅲa類) .....	23
第14図	出土遺物実測図7 (甕形土器Ⅲb類) .....	24
第15図	出土遺物実測図8 (甕形土器Ⅲc類) .....	25
第16図	出土遺物実測図9 (甕形土器Ⅰ～Ⅲ類) .....	26
第17図	出土遺物実測図10 (甕形土器Ⅲ類、Ⅳ類) .....	27
第18図	出土遺物実測図11 (甕形土器Ⅳ類) .....	28
第19図	出土遺物実測図12 (甕形土器Ⅴ類、Ⅵ類、Ⅶ類) .....	29
第20図	出土遺物実測図13 (甕形土器Ⅷ類、Ⅸ類、Ⅹ類、Ⅺ類) .....	30
第21図	出土遺物実測図14 (鉢形土器Ⅰa類、Ⅰb類) .....	32
第22図	出土遺物実測図15 (鉢形土器Ⅰb類、Ⅰc類) .....	33
第23図	出土遺物実測図16 (鉢形土器Ⅰd類、Ⅰe類、Ⅱa類、Ⅱb類) .....	34
第24図	出土遺物実測図17 (鉢形土器Ⅱb類、Ⅱc類) .....	35
第25図	出土遺物実測図18 (鉢形土器Ⅱc類) .....	36
第26図	出土遺物実測図19 (鉢形土器Ⅱc類) .....	37
第27図	出土遺物実測図20 (鉢形土器Ⅱc類) .....	38
第28図	出土遺物実測図21 (鉢形土器Ⅱc類、Ⅱd類) .....	39
第29図	出土遺物実測図22 (鉢形土器Ⅱd類、Ⅱe類、Ⅱf類) .....	40
第30図	出土遺物実測図23 (鉢形土器Ⅱf類) .....	41
第31図	出土遺物実測図24 (高杯形土器Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅲ類) .....	43
第32図	出土遺物実測図25 (高杯形土器Ⅲ類、Ⅳ類、Ⅴ類) .....	44
第33図	出土遺物実測図26 (高杯形土器Ⅴ類、Ⅵ類、Ⅶ類、Ⅷ類) .....	45
第34図	出土遺物実測図27 (埴Ⅰa類～Ⅲc類) .....	46
第35図	出土遺物実測図28 (ミニチュア土器Ⅰa類、Ⅰb類、Ⅱ類、Ⅲa類、Ⅲb類) .....	47
第36図	出土遺物実測図29 (ミニチュア土器Ⅲb類、Ⅲc類、Ⅲd類) .....	48
第37図	出土遺物実測図30 (その他の土器、土師器、須恵器、青磁、白磁) .....	49
第38図	出土遺物実測図31 (甕形土器Ⅰa類、Ⅱb類、甕形土器) .....	58
第39図	出土遺物実測図32 (鉢形土器Ⅰb類、Ⅱb類、Ⅱc類) .....	59
第40図	出土遺物実測図33 (高杯形土器、ミニチュア土器) .....	60
第41図	出土遺物実測図34 (甕形土器、甕形土器、鉢形土器Ⅰa類) .....	63
第42図	出土遺物実測図35 (鉢形土器Ⅰa類～Ⅰc類、Ⅱa類、Ⅱc類) .....	64
第43図	出土遺物実測図36 (鉢形土器Ⅱc類、Ⅱe類、Ⅱf類) .....	65
第44図	出土遺物実測図37 (高杯形土器、埴、ミニチュア土器、その他の土器) .....	66
第45図	出土遺物実測図38 (鉢形土器、ミニチュア土器、須恵器) .....	68
第46図	出土遺物実測図39 (甕形土器) .....	70
第47図	出土遺物実測図40 (甕形土器) .....	71
第48図	出土遺物実測図41 (鉢形土器Ⅰa類、Ⅱa類、Ⅱc類) .....	73
第49図	出土遺物実測図42 (鉢形土器Ⅱc類、Ⅱf類) .....	74

第50図	出土遺物実測図43 (高杯形土器) .....	75
第51図	出土遺物実測図44 (ミニチュア土器、その他の土器、土師器) .....	76
第52図	出土遺物実測図45 (須恵器・陶器) .....	79
第53図	出土遺物実測図46 (須恵器) .....	80

## 表 目 次

第1表	報告書抄録	
第2表	周辺遺跡地名表 .....	6
第3表	土器溜まり一覧表 .....	12
第4表	土坑一覧表 .....	13
第5表	後ヶ迫A遺跡出土遺物個数表 (土器片) .....	16
第6表	後ヶ迫A遺跡出土遺物個数表 (実測分) .....	16
第7～13表	出土土器計測表(1)～(7) .....	50～56
第14表	出土土師器計測表(1) .....	56
第15表	出土須恵器計測表(1) .....	56
第16表	出土磁器計測表 .....	56
第17表	出土土器計測表(8) .....	60
第18表	出土土器計測表(9) .....	62
第19表、第20表	出土土器計測表(10)～(11) .....	66、67
第21表	出土須恵器計測表(2) .....	67
第22表、第23表	出土土器計測表(12)、(13) .....	77、78
第24表	出土土師器観察表(2) .....	78
第25表	出土須恵器計測表(3) .....	78

## 図 板 目 次

巻頭図板1		
巻頭図板2		
巻頭図板3		
巻頭図板4		
図板1	後ヶ迫A遺跡出土遺物(1) .....	85
図板2	後ヶ迫A遺跡出土遺物(2) .....	86
図板3	後ヶ迫A遺跡出土遺物(3) .....	87
図板4	後ヶ迫A遺跡出土遺物(4) .....	88



## 第I章 調査の経緯

図板5	後ヶ迫A遺跡出土遺物(5)	89
図板6	後ヶ迫A遺跡出土遺物(6)	90
図板7	後ヶ迫A遺跡出土遺物(7)	91
図板8	後ヶ迫A遺跡出土遺物(8)	92
図板9	後ヶ迫A遺跡出土遺物(9)	93
図板10	後ヶ迫A遺跡出土遺物(10)	94
図板11	後ヶ迫A遺跡出土遺物(11)	95
図板12	後ヶ迫A遺跡出土遺物(12)	96
図板13	後ヶ迫A遺跡出土遺物(13)	97
図板14	後ヶ迫A遺跡出土遺物(14)	98
図板15	後ヶ迫A遺跡出土遺物(15)	99
図板16	後ヶ迫A遺跡出土遺物(16)	100
図板17	後ヶ迫A遺跡出土遺物(17)	101
図板18	後ヶ迫A遺跡出土遺物(18)	102
図板19	後ヶ迫A遺跡出土遺物(19)	103
図板20	後ヶ迫A遺跡出土遺物(20)	104
図板21	後ヶ迫A遺跡出土遺物(21)	105
図板22	後ヶ迫A遺跡出土遺物(22)	106
図板23	後ヶ迫A遺跡出土遺物(23)	107
図板24	後ヶ迫A遺跡出土遺物(24)	108
図板25	後ヶ迫A遺跡出土遺物(25)	109
図板26	後ヶ迫A遺跡出土遺物(26)	110
図板27	後ヶ迫A遺跡出土遺物(27)	111
図板28	後ヶ迫A遺跡出土遺物(28)	112
図板29	後ヶ迫A遺跡出土遺物(29)	113
図板30	後ヶ迫A遺跡出土遺物(30)	114
図板31	後ヶ迫A遺跡出土遺物(31)	115
図板32	後ヶ迫A遺跡出土遺物(32)	116
図板33	後ヶ迫A遺跡出土遺物(33)	117
図板34	後ヶ迫A遺跡出土遺物(34)	118
図板35	後ヶ迫A遺跡出土遺物(35)	119
図板36	後ヶ迫A遺跡出土遺物(36)	120
図板37	後ヶ迫A遺跡出土遺物(37)	121
図板38	後ヶ迫A遺跡出土遺物(38)	122
図板39	後ヶ迫A遺跡出土遺物(39)	123
図板40	後ヶ迫A遺跡出土遺物(40)	124
図板41	後ヶ迫A遺跡出土遺物(41)	125

### 第1節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政課農地整備課は、垂水市終原柵原下—新城宮脇地区に県営農農地整備事業（垂水南Ⅰ期、垂水南Ⅱ期）を計画し、鹿児島県教育庁文化財課に事業対象地区の埋蔵文化財の包蔵地照会を行った。これを受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成3年に埋蔵文化財分布調査を行ったところ、事業対象区が遺物散布地として確認された。その結果をもとに、県文化財課と垂水市教育委員会、県農政課、垂水市耕地課で協議したところ、埋蔵文化財保護と事業の調整を行うために事前に埋蔵文化財確認調査を平成7年に実施することになった。その結果約2,700㎡が遺跡の包蔵地として確認された。

以上の結果を受けて再度協議を行った結果、設計変更が不可能で現状保存が困難である約2,700㎡について、全面発掘調査を平成8年度に実施することになった。

### 第2節 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

調査主体者	垂水市教育委員会		
調査責任者	〃	教 育 長	川井田 稔
調査企画者	〃	社会教育課長	西田 和 則
調査事務	〃	社会教育課長補佐	堀之内 俊 一
		社会教育係長	戸 越 靖 彦
調査担当者	〃	社会教育係主事	鶴 岡 一 伸
	〃	社会教育係文化財主事	羽 生 文 彦
出土遺物指導	鹿児島県考古学会	会 長	河 口 貞 徳
	鹿児島大学法文学部	教 授	上 村 俊 雄
		助 教 授	本 田 道 輝
		助 手	中 村 直 子
		助 手	大 西 智 和

#### 発掘調査及び整理作業員

安楽 求・岩田泰広・上山末広・鹿屋鳴雄・感王寺光義・黒岩 透・段 松吉・永峯春明・池田テール・池田柳子・石踊光子・鶴岡弘子・大迫ヒロ子・海元日路美・梶原明美・加治屋みな子・鹿屋ツギエ・川原富士子・神田ハル子・上妻奈緒美・小谷チズ子・迫田タマ子・寒川朋枝・田中ハル子・田村まゆみ・徳村アキエ・西尾衣久美・西尾フミエ・柳山 栄・船間亜由美・堀添美秋・前木場よし子・松元スギ・満田ノブ子・宮迫良子・安田道子・柳田美恵・吉永二美

### 第3節 調査の経過

発掘調査は、平成8年7月29日～平成8年10月18日まで行い、以下平成11年3月まで報告書作成のための整理作業を実施した。

発掘調査の経過は以下の日誌抄のとおりである。

#### [日誌抄]

- 7月29日(月)  
～8月2日(金) 発掘調査開始。発掘調査の説明と注意。調査環境(プレハブ及びテント設営、用具の搬入等)の整備。調査区のグリッド設定。西端の西-A・B-10区より東方へ調査開始。西-A・B-8、9区に土器溜まり検出。土器溜まり直上より青磁碗・白磁皿検出。
- 8月5日(月)  
～8月9日(金) 西-A・B-5・6区、同3・4区より土器溜まり検出。西方より第I地点・第II地点・第III地点と呼称する。西-A・B-1～10区掘り下げ。
- 8月12日(月)  
～8月16日(金) 西-A・B-1～10区掘り下げ・遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。
- 8月19日(月)  
～8月23日(金) 西-A・B-1～10区土器溜まり以外の掘り下げ完了。土器溜まりの検出・遺物出土状況図・写真撮影。
- 8月26日(月)  
～8月30日(金) 西-A・B-1～10区土器溜まりの写真撮影。第II地点、第III地点の取り上げ・遺物出土状況図。完形土器実測・取り上げ
- 9月2日(月)  
～9月6日(金) 第II地点、第III地点の取り上げと掘り下げ。平行して壁面土層断面実測、完形土器実測・取り上げ。
- 9月9日(月)  
～9月13日(金) 第II地点、第III地点の掘り下げを完了。遺物出土状況図・写真撮影。第I地点の遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ・掘り下げ。調査区の東方に東-A・B-1～11区を設定、掘り下げ。東-A・B-11区に土器溜まり検出。第IV地点と呼称する。完形土器実測・取り上げ。
- 9月16日(月)  
～9月20日(金) 第I地点、第IV地点の遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ及び掘り下げ。完形土器実測・取り上げ。
- 9月23日(月)  
～9月27日(金) 第I地点、第IV地点の遺物出土状況図・写真撮影。取り上げ及び掘り下げ。完形土器実測・取り上げ。
- 9月30日(月)  
～10月4日(金) 第I地点、第IV地点の遺物出土状況図・写真撮影。取り上げ及び掘り下げ。完形土器実測・取り上げ。
- 10月7日(月)  
～10月11日(金) 第IV地点の掘り下げを完了。遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。第I地点の遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。完形土器実測・取り上げ。
- 10月14日(月)  
～10月18日(金) 第I地点の掘り下げを完了。遺物出土状況図・写真撮影・取り上げ。埋め戻し。発掘調査の完了。

## 第二章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地形概説

後々追A遺跡は、垂水市街地の南東約5km(北緯31°30'25"、東経130°30'10")に位置する。垂水市の地形は、大きく3地域に分けることができる。東方の高隈山地を中心とする山地、その麓から鹿尾島湾近くまで緩傾斜をなして広がるいわゆるシラス台地、及び台地間や海岸にある沖積平野の3つである。

シラス台地は、高隈山地と接する部分が海拔約200mであるが、西方ほど次第に低くなり、市街地付近では高さ数十mの断崖を連ね海岸に望んでいる。遺跡の北上にある上野原台地では、東方から約1.5°の傾斜角をもって西方へ低く傾いている。

遺跡の位置するところは、台地と海岸線との間に存在する台地縁辺部の崩土の堆積による小微高地であり、海岸線に沿って存在する。

### 第2節 地質概説

先述の第1節で分けた山地帯は、白亜系の四万十黒層群の高隈山帯(橋本, 1926)に相当し、海底地すべり堆積物を挟む砂岩頁岩互層の高隈山層(太田・河内, 1965)と牛根層(小川内・岩松, 1986)部分が中新世後期(14Ma)の高隈山花崗岩(柴田, 1978)の貫入に伴いホルンフェルス化している。

その山地から、浸食・運搬・堆積作用受け扇状地状の垂水砂礫層を形成。その上に旧期ローム層、大隅降下軽石層・妻屋火砕流堆積物・亀割坂角礫層・入戸火砕流堆積物・新期ローム層及びそれらの二次堆積物からなるいわゆるシラス台地を構成している。

沖積層は砂や粘土、小石からなる。

特筆すべき点は、透水性の高いシラスの直下に緻密な旧期ローム層が堆積しており、それが不透水層となり、シラス台地縁辺部の崖下において湧水がしばしばみられる点である。本調査区域の近辺の沖積平野においても地表面下1～2mの深さで水が湧き出る。

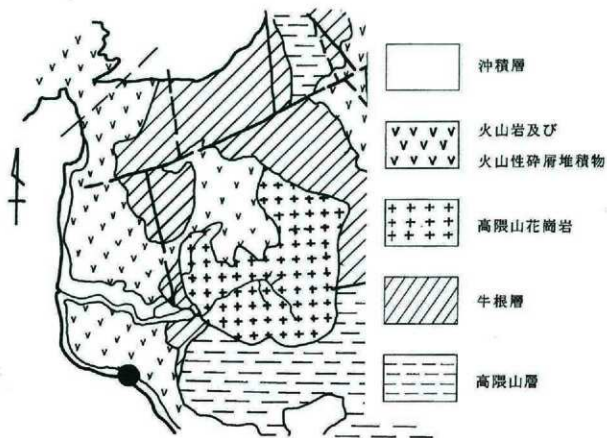
### 第3節 歴史概説及び周辺の遺跡

垂水市史によると、「過去において考古資料となる遺跡地は少なかった。」とある。しかし近年の鹿児島県教育委員会による広域分布調査の結果、今回調査を行った地域周辺においても、第2図及び第1表にみられるように縄文、中世の城跡まで様々な遺跡が点在していることが分かってきた。その大部分は台地上と海岸線沿いの沖積平野に集中し、古墳時代のものが多い。

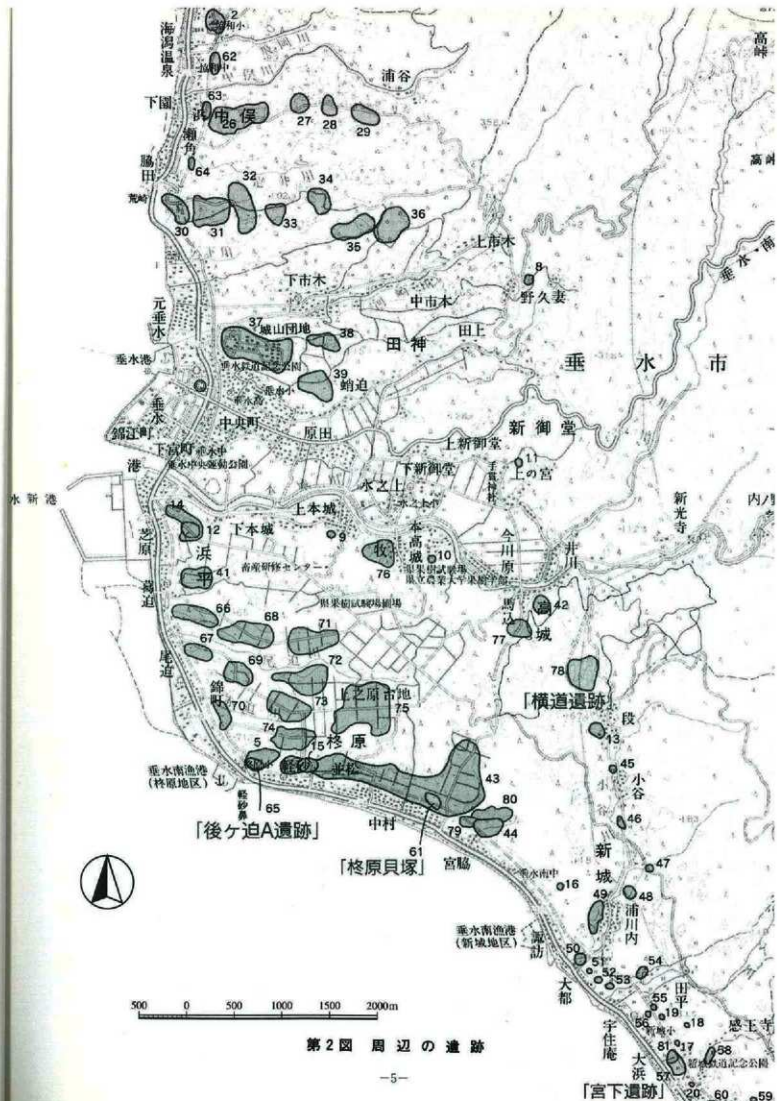


【参考文献】

- 太田 良平 「5万分の1地質図幅『垂水』および同説明書」 1964 地質調査所  
 垂水市教育委員会 「垂水市史 上巻」 1974  
 橋本 勇 「九州南部における時代未詳層群の総括」  
 (『九大教養地学研報 9 13-69』 1962)  
 小川内良人ほか 「大隅半島四十万帯の地質構造」  
 (『鹿大理学部紀要(地学・生物学) 19』 1986)  
 柴田 賢 「西日本外帯における第三紀花崗岩貫入の同時性」  
 (『地調月報 29 551-554』 1978)  
 KOBAYASHI et al 「Thickness and Grain-size Distribution of the Osumi Pumice Fall  
 Deposit from the Aira Caldera」  
 (『Bull. Volcanol. Soc. Japan. 2 28 2 129-139』)  
 荒牧 重雄 「始良カルデラと入戸火砕流」 (『月刊 地球Vol. 5 2』 1983)  
 芹沢 長介 「マンローがケンブリッジ大学に寄贈した日本の資料その他について」  
 (『考古学研究 第24巻 第3・4号』 1977)  
 垂水市教育委員会 「垂水市史料集(十一) 椋原編」 1996



第1図 垂水市の地質概略図



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	水 迫	浜平水迫	平地	弥 生	弥生土器片	垂水市史
2	本 城 跡	本城跡跡下	平地	弥 生	弥生土器片	垂水市史垂水市史
3	不 <sub>(下之域)</sub> 城 跡	本城上本城	台地上	弥 <sub>委</sub> 生 <sub>土</sub> 器 <sub>可</sub>		垂水市史
4	浜 平	浜平	台 地	古 墳	成川式土器	
5	葛 迫 城 跡	浜平葛迫	台地上	弥 <sub>委</sub> 生 <sub>土</sub> 器 <sub>可</sub>		垂水市史
6	迫 頭	浜平	台地上	古 墳	成川式土器	
7	平 谷	浜平	台地上	古 墳	成川式土器	
8	尾 迫 城 跡	浜平尾迫	台地上	弥 <sub>委</sub> 生 <sub>土</sub> 器 <sub>可</sub>		垂水市史
9	高 尾	浜平	台地上	古 墳	成川式土器	
10	小 堀 内	柘原	台地上	古 墳	成川式土器	
11	西 ケ 迫	柘原	台地上	古 墳	成川式土器	
12	一本松 後	柘原	台地上	古 墳	成川式土器	
13	薮 ケ 崎	柘原	台地上	古 墳	成川式土器	
14	後 ケ 迫	柘原後ヶ迫	平 地	古 墳	成川式土器	
15	大 迫	柘原	台地上	古 墳		
16	経 砂	柘原経砂	平 地	弥 生	弥生土器片	垂水市史
17	柘原遺跡群	柘原	平 地	縄 文・古 墳	貝塚	広範囲の遺跡
18	柘原貝塚	柘原下	平 地	縄 文	縄文～古代	今回調査
19	宮ノ前	新城	平 地	縄 文～古 墳		
20	前 畑	新城	平 地	縄 文～古 墳		
21	重 田	新城重田	平 地	古 墳		
22	城 跡	高城本高城	台 地	弥 生		
23	高 城 跡	高城小学校	台地上	弥 <sub>委</sub> 生 <sub>土</sub> 器 <sub>可</sub>		垂水市史
24	横 遺	高城段	谷・尾根	古 墳	成川式土器	
25	西 ケ 迫	段西ヶ迫	山 麓	弥 生	弥生土器片	垂水市史
26	小 谷	新城 小谷	沖積地	古 墳	成川式土器	垂水市史平成3年農政分布
27	大 丸	新城 小谷	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
28	宮 壺	新城 小谷	沖積地	古 墳～歴史	土器	平成3年農政分布
29	東 堂	新城 小谷	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
30	高 松	新城 浦川内	沖積地	縄 文～歴史	土器片	平成3年農政分布
31	諏 訪	新城 諏訪下福荷平	平 地	弥 生	弥生土器片	垂水市史 昭和42年上田親明方畑地
32	松 崎	新城 諏訪	沖積地	縄 文～古 墳	土器片	平成3年農政分布
33	須 崎	新城 大都	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
34	横 間 下	新城 大都	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
35	竹 下	新城 大都	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
36	楠 木	新城 田平	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
37	前 尻	新城 宇住庵	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
38	中 牟 田	新城 宇住庵	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
39	田中川内字 田平宅地	新城 田中川内田平	平 地	弥 生	弥生土器片・壺	垂水市史・昭和30・45年 木田シヅカ宅地 田平屋敷八分
40	小 房 迫 前	新城 大浜	平 地	古 墳	成川式土器	
41	宮 下	新城 大浜	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
42	感 王 寺 口	新城 感王寺	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
43	畑	新城	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布
44	井ノ尾	新城	沖積地	古 墳	成川式土器	平成3年農政分布

## 第Ⅲ章 発掘調査

## 第1節 調査の概要

事業対象区の中央に側溝があったため、調査区を大別して側溝より以東を東区、以西を西区と設定した。東区は3m×10mのグリッドを、側溝がわから1区、2区と設定し、10区まで設定した(東1区～東10区)。西区も同様に、側溝がわから11m×10mのグリッドを1区から12区まで設定した。(西1区～西12区。但し西1区と西12区については11m×7mで設定。)東区は平成7年度に実施された確認調査により、遺跡の面積が限られていることが分かっていたので、西区と比して調査区の縦幅を狭くして設定した。調査はまず西1区～西12区まで行い、その後東1区～東10区までを実施した。

その結果、地表約1.2mのところまで土器溜まりが4基確認された。(西区より3基、東区より1基検出された。)これは、限られた面積の中に土器が集中して出土するというものであり、本遺跡の出土品の大半はこの土器溜まりからの出土である。この土器溜まりは調査区の西方から第I地点、第II地点、第III地点、第IV地点とした。この土器は弥生時代後期から古墳時代頃の土器様式であるいわゆる「成川式土器」のうち、古墳時代の後半半期に使用されたものであり、本遺跡の主体も同時期であると想定される。

出土した遺構は4基の土器溜まりと土坑が数基であり(土器溜まりは遺構として取り扱った)、主な遺物としては前述した成川式土器の他に、第I地点直上出土の青磁椀・白磁皿、同地点出土の脚付き壺等があげられる。

## 第2節 層 序

場所により若干の相違はあるが、基本的には以下のとおりである。

I 層 表土。現耕作土。土器片の散布。

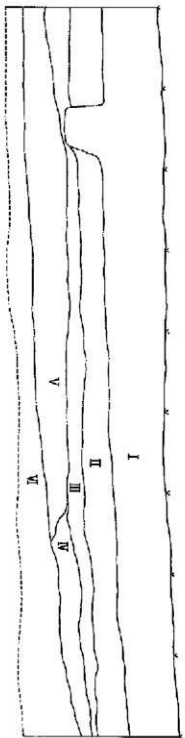
II 層 旧耕作土。

III 層 黒色土。軽石を大量に含む。若干粘性がある。古墳時代の遺物包含層。

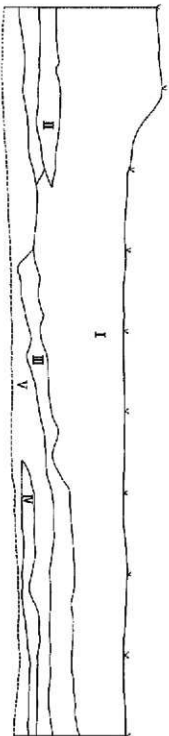
IV 層 淡黄色褐色土。一時的なシラスの2次体積土の流れ込み。

V 層 暗灰色褐色土。

VI 層 暗灰色褐色砂質土。



調査区内土層断面

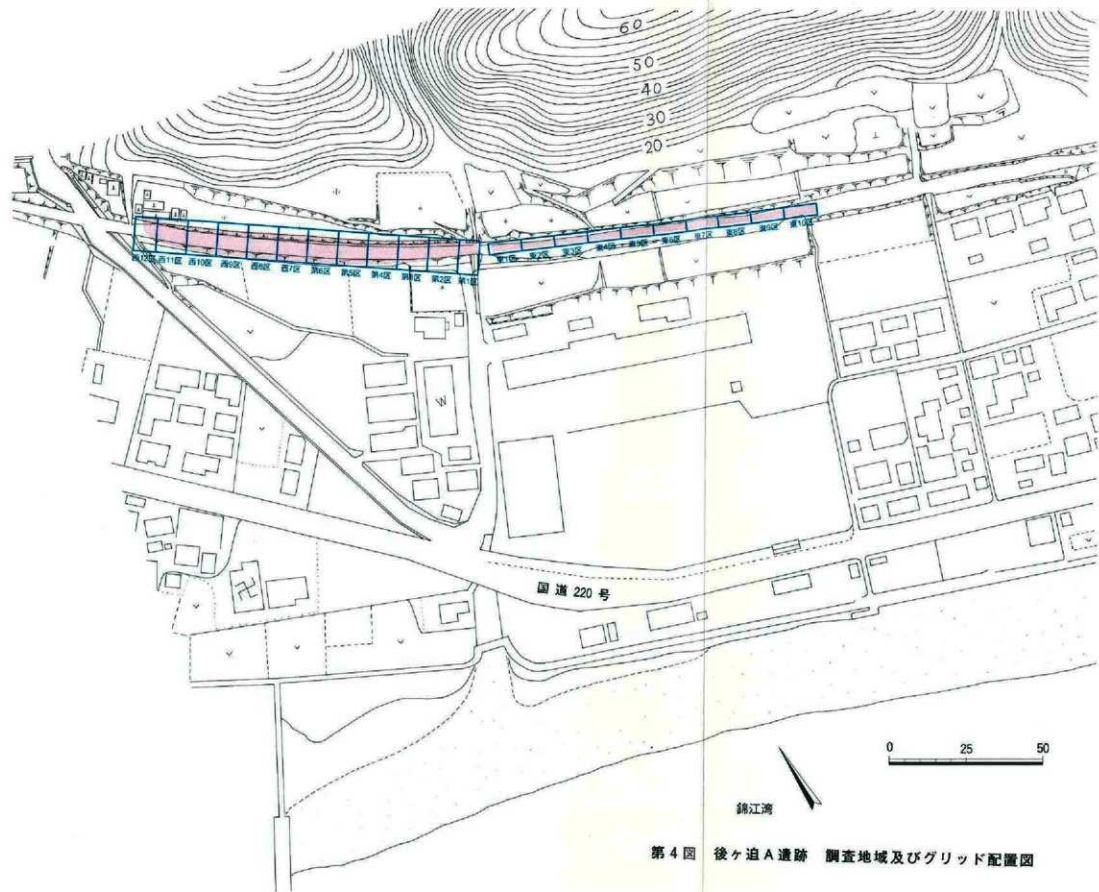


西10区南側断面

0 1 2 m

第3図 後夕迫A遺跡 調査区内土層断面





第 4 図 後ヶ迫 A 遺跡 調査地域及びグリッド配置図

「西区」



「東区」



第5図 IV層上面の地形と遺構配置図

### 第3節 遺 構

本遺跡より出土した遺構は、土器溜まりが4基と土坑53基、溝が1基である。

#### 土器溜まり

本遺跡からは4基の土器溜まりが検出された。(ここでいう土器溜まりとは、限られた面積の中から遺物が集中して出土する場のことであるが、このように大量の遺物が一箇所から集中して出土しているため、そこには何らかの人為的作用が働いていると判断して、本遺跡では土器溜まりを遺構として取り扱った。)西区より3基と、東区より1基の土器溜まりが検出されたが、調査区の西方よりそれぞれ土器溜まり第Ⅰ地点、第Ⅱ地点、第Ⅲ地点、第Ⅳ地点と呼称する。土器溜まり第Ⅳ地点は他の3地点と比較して小規模なもので、厚さも他の3地点と比較して薄かった。

土器溜まり内の出土遺物については、密集して出土するという状態であったため、平板・レベルによる遺物を点として捕らえる取り上げ方ではあまり意味がないと判断し、土器溜まりのエリアを押しえた後、各土器溜まりごとに一括して取り上げを行った。

本遺跡より出土した土器溜まりについては、内包する遺物の大半が成川式土器であるということが分かっているため、土器溜まりが形成されるに至った背景や、形成時期といったことについては不明である。形成時期については、成川式土器が出土していることからある程度の考察はできるが、土器溜まりの直上から青白磁が出土していたり、出土土師器皿に糸切りのものがあつたり、出土須恵器ごく少数ではあるが新しい時代と思われるものが混入したりしており、単純に古墳時代と断定することはできない。あるいは古墳時代より後代に形成されたとも考えることもできよう。

第3表 後ヶ迫A遺跡検出土器溜まり一覧表

	面積(m <sup>2</sup> )	厚さ(cm)	検出区
第Ⅰ地点	128	34	西3
第Ⅱ地点	107.5	30	西4・5区
第Ⅲ地点	82.5	32	西8区
第Ⅳ地点	38.5	20	東11区

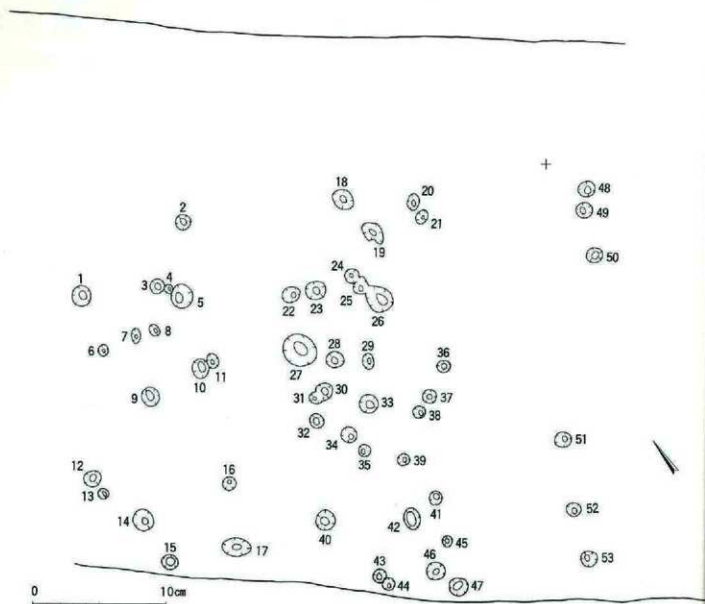
#### 土坑について

本遺跡からは、53基の土坑が検出された。それらは西7・8区に集中して検出されたのだが、土坑の配置には特に規則性を見いだすことはできない。大きさは概ね直径25cm前後である。深さは20cm前後から40cm前後である。Ⅳ層上面から検出され、埋土はⅢ層である。

土坑内からの出土遺物は確認されなかった。

第4表 後ヶ迫A遺跡検出土坑一覧表

番号	検出区	大きさ(cm)	プラン	深さ(cm)	番号	検出区	大きさ(cm)	プラン	深さ(cm)
1	西7	30.0×30.0	円形	25.0	28	西7	25.0×27.5	円形	20.0
2	西7	22.5×25.0	円形	48.0	29	西7	22.5×16.3	円形	20.0
3	西7	22.5×20.0	円形	33.0	30	西7	25.0×25.0	円形	21.0
4	西7	12.5×12.5	円形	30.0	31	西7	17.5×17.5	円形	17.0
5	西7	35.0×32.5	円形	28.0	32	西7	22.5×20.0	円形	37.0
6	西7	17.5×15.0	円形	30.0	33	西7	27.5×27.5	円形	33.0
7	西7	15.0×22.5	円形	25.0	34	西7	25.0×23.8	円形	35.0
8	西7	17.5×17.5	円形	30.0	35	西7	17.5×17.5	円形	30.0
9	西7	27.5×27.5	円形	29.0	36	西7	17.5×20.0	円形	30.0
10	西7	27.5×25.0	円形	14.0	37	西7	20.0×21.3	円形	39.0
11	西7	22.5×17.5	円形	10.0	38	西7	17.5×20.0	円形	33.0
12	西7	25.0×27.5	円形	53.5	39	西7	17.5×17.5	円形	40.0
13	西7	15.0×17.5	円形	22.5	40	西7	30.0×30.0	円形	13.0
14	西7	30.0×30.0	円形	17.0	41	西7	22.5×17.5	円形	44.0
15	西7	22.5×25.0	円形	20.0	42	西7	32.5×25.0	楕円形	30.0
16	西7	20.0×22.5	円形	30.0	43	西7	20.0×20.0	円形	11.5
17	西7	27.5×42.5	楕円形	43.0	44	西7	20.0×20.0	円形	10.0
18	西7	27.5×30.0	円形	35.0	45	西7	17.5×15.0	円形	10.0
19	西7	30.0×32.5	不定形	30.0	46	西7	26.3×27.5	円形	20.0
20	西7	25.0×20.0	円形	39.0	47	西7	27.5×27.5	円形	22.0
21	西7	22.5×17.5	円形	41.0	48	西8	23.8×25.0	円形	45.0
22	西7	25.0×25.0	円形	20.0	49	西8	23.8×25.0	円形	40.0
23	西7	26.3×30.0	円形	29.0	50	西8	21.3×23.8	円形	34.0
24	西7	22.5×22.5	円形	24.0	51	西8	22.5×25.0	円形	42.0
25	西7	26.3×22.5	円形	28.0	52	西8	20.0×22.5	円形	46.0
26	西7	35.0×42.5	円形	40.0	53	西8	22.5×25.0	円形	27.0
27	西7	47.5×50.0	円形	65.0					

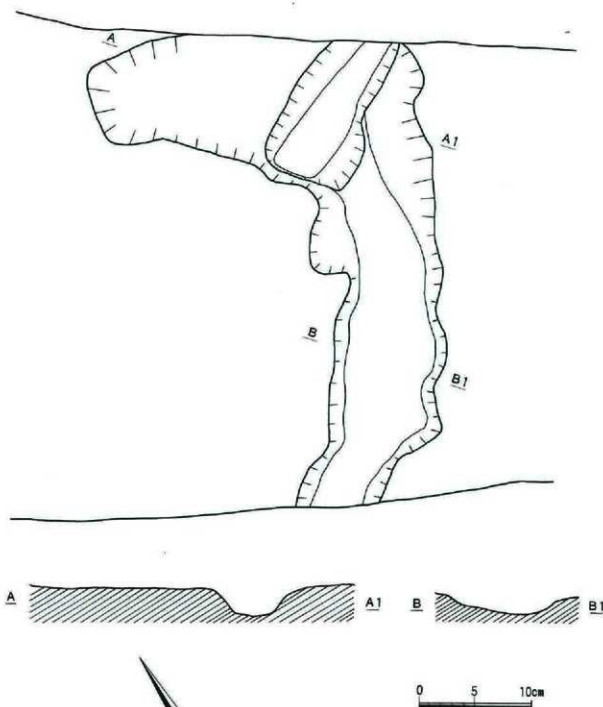


第6図 土坑出土状況

溝

西4・5区の境目付近から溝が1基検出された。溝はIV層上面から検出され、溝内の埋土はIII層の土である。南西から北東へ走っているが、北側壁面付近では幅が広がり、一段下がって深くなっている。深さは20cm前後と比較的浅いが、北側壁面付近で一段下がっている箇所では50cm前後である。

溝内からの出土遺物は確認されなかった。



第7図 溝検出状況



#### 第4節 出土遺物

調査区域からは多量の土器が出土したが、大半は土器溜まりからの出土によるものであった。土器溜まりの出土状況としては、限られた狭い範囲から土器が極めて密集した状態で出土するというもので、そのような土器溜まりは全部で4基出土した。その中からは完形あるいは完形に近い土器も多数出土した。4基の土器溜まりを調査区の西方から第Ⅰ地点、第Ⅱ地点、第Ⅲ地点、第Ⅳ地点とそれぞれ呼称し、以下それぞれの地点ごとに分けて記述していく。また、その他の地区から出土したのものに関しては一括してその他の地点として取り扱っていく。

第Ⅰ地点から出土したものの実測図を多く取り上げているが、これは単純に遺物の出土量の差異によるものではなく、完形率の差異によるものである。完形品あるいはそれに近いもの（実測図を付したもの）の出土点数については表6を、土器片の出土点数については表5にまとめてあるので参照されたい。土器片については残存率が低く器種ごとに分類するのは困難であるため、口縁部、胴部、突帯を有するもの、底部、高杯片という分類に留めた。

出土した土器は古墳時代のいわゆる成川式土器が大半を占めるが、須恵器も若干出土している。須恵器は土器溜まり外の地点から破片として出土したものが多く、中には新しい時代と思われるものも含まれていた。また、土器溜まり第Ⅰ地点の直上からは熊泉窯系の青磁椀1点と白磁皿3点が出土している。これらはごく少数であるので、各地ごとに土器と一括して出土遺物として記述していく。成川式土器については、甕形土器、壺形土器、高杯形土器、埴、ミニチュア土器等実に多種多様なものが出土している。前述したように土器溜まりからの出土品が非常に多く、層位によって時期差を捉えることが困難であるため、土器の形態や器種による分類に主眼を置いて記述した。

第5表 後ヶ追A遺跡出土土器点数表(土器片)

	第1地点	第2地点	第3地点	第4地点	その他の地点
口縁部	3,575	1,379	3,366	373	7,165
胴部	15,801	8,054	59,294		193
突帯	1,505	864	3,791		1,162
底部	1,909	1,085	4,329	15,491	1,134
高杯片	133		689	179	37

第6表 後ヶ追A遺跡出土土器点数表(実測図)

	第1地点	第2地点	第3地点	第4地点	その他の地点
甕形土器	33	3	3		8
壺形土器	21	1	1	0	4
鉢形土器	119	12	26	4	16
高杯形土器	30	1	4		29
埴形土器	16		1	0	0
ミニチュア土器	48	1	3	5	12
その他の土器	6		2	0	2

#### Ⅰ 第Ⅰ地点出土の遺物 (第8図1～第30図 278)

##### ① 甕形土器 (第8図～1第15図33)

甕は、胴部が長く比較的大型のものをⅠ類、胴部が短く比較的小型のものをⅡ類と大別し、胴部下端と脚部のみが残存しているものに関しては一括してⅢ類として取り扱った。更に、突帯の有無・形態、口縁部や脚部の形状によりそれぞれ細分を試みた。

##### Ⅰ a類 (第1図1、2)

胴部に1条の刻み目突帯を有するタイプである。刻み目は楕円形で、刻み目間の間隔が密に施されている。いずれも脚は先端へ向けて直線的に開き、内面天井部に突起をもつ。1は口縁部がやや内湾する。

##### Ⅰ b類 (第9図3～第10図5)

断面が緩い台形または三角形の突帯に、間隔が広くまばらに刻み目が施されているものである。3はやや内湾する口縁部を有する。いずれも脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。

##### Ⅰ c類 (第10図6～第12図11)

胴部に1条の突帯を有するが、突帯の文様が指によるつまみ整形で作られたもので、いわゆる絡縄突帯を有するものである。突帯は途中で刷り上げられるように分断されているものもある。7、8は口縁部が意識的に施されている。口縁部は直行あるいはやや内湾する。脚部は先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。10は胴部突帯の他に、胴部と脚部の境目にも1条絡縄突帯を有する。

##### Ⅰ d類 (第12図12)

緩く屈曲する口縁部を有するタイプである。胴部に1条の刻み目突帯を有する。

##### Ⅱ a類 (第12図13)

斜方向の刻み目が密に施された突帯を1条胴部に有するタイプである。口縁部はやや内湾し、脚は先端へ向けて外反しながら開き、内面天井部が広い平坦面をもつ。

##### Ⅱ b類 (第12図14～16)

胴部に断面が緩い台形または三角形の突帯を1条有し、突帯には間隔が広くまばらに刻み目が施されているものである。口縁部は内湾ぎみに直行する。14の脚は先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。15の脚は先端へ向けて外反しながら開き、内面天井部が広い平坦面をもつ。16の脚は比較的長く、先端へ向けて外反しながら開き、内面天井部の断面形が放射線を描く。

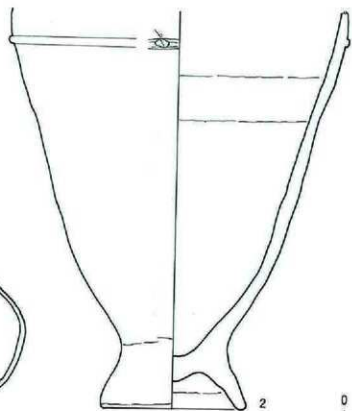
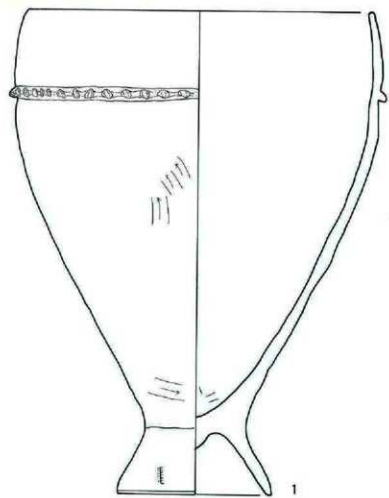
##### Ⅱ c類 (第12図17、第13図18)

胴部に1条の絡縄突帯を有するタイプである。口縁部は17が内湾ぎみに直行し、18は直行する。17の脚は比較的長く、先端へ向けて直線的に開き、内面天井部の断面形が放射線を描く。18の脚は先端へ向けてやや外反しながら開き、内面天井部が広い平坦面をもつ。

##### Ⅲ a類 (第13図19～24)

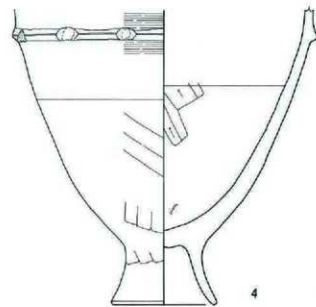
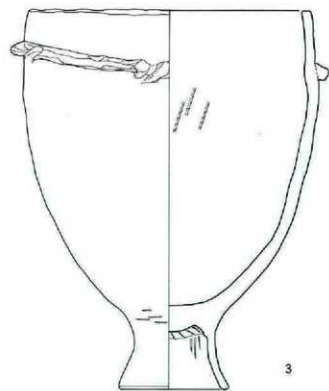
脚が先端へ向けて外反しながら開き、内面天井部が広い平坦面をもつものである。19は胴部と脚部の境目に1条の断面が緩い三角形の突帯を有する。





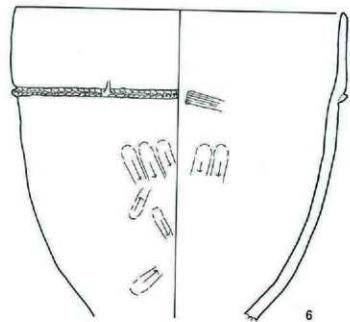
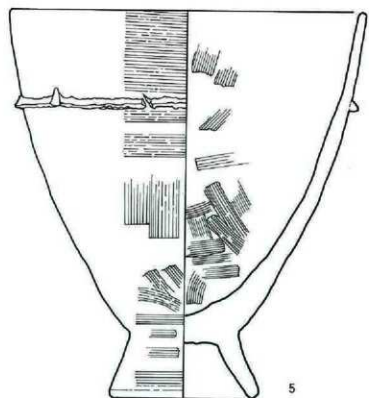
第8图 出土遗物实测图1 (甕形土器 I a 類)

0 10cm

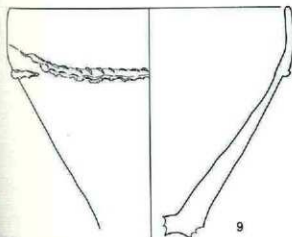
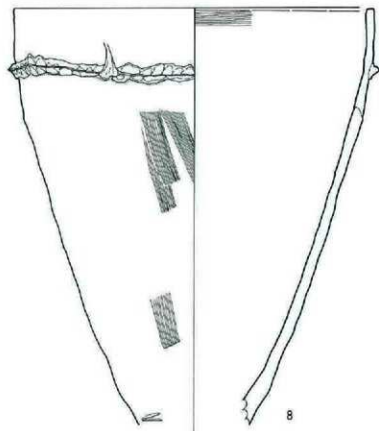
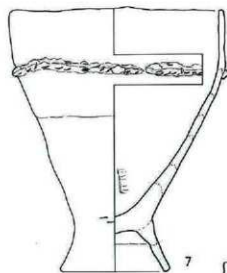


0 10cm

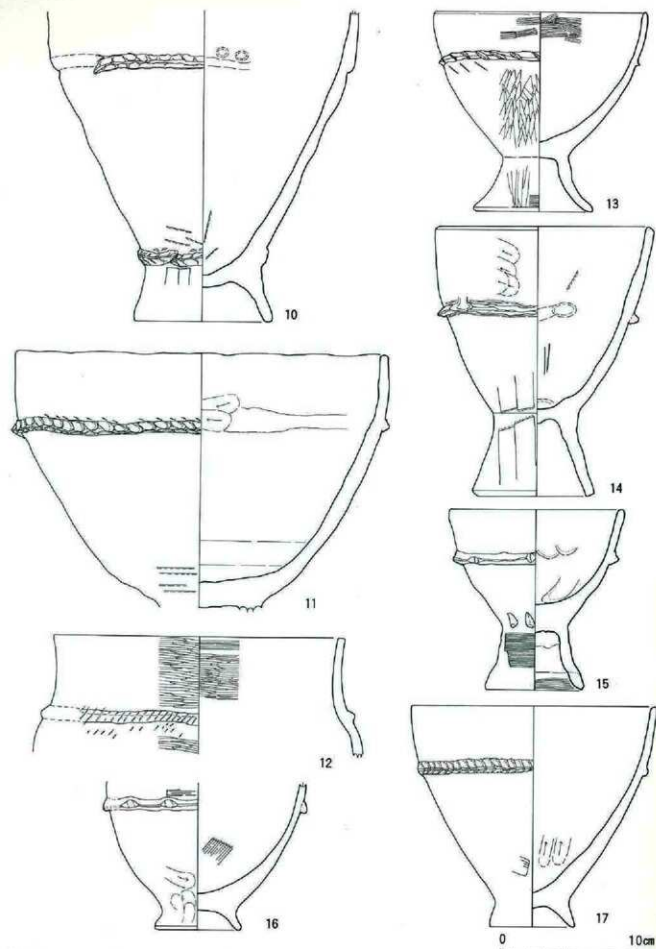
第9图 出土遗物实测图2 (甕形土器 I b 類)



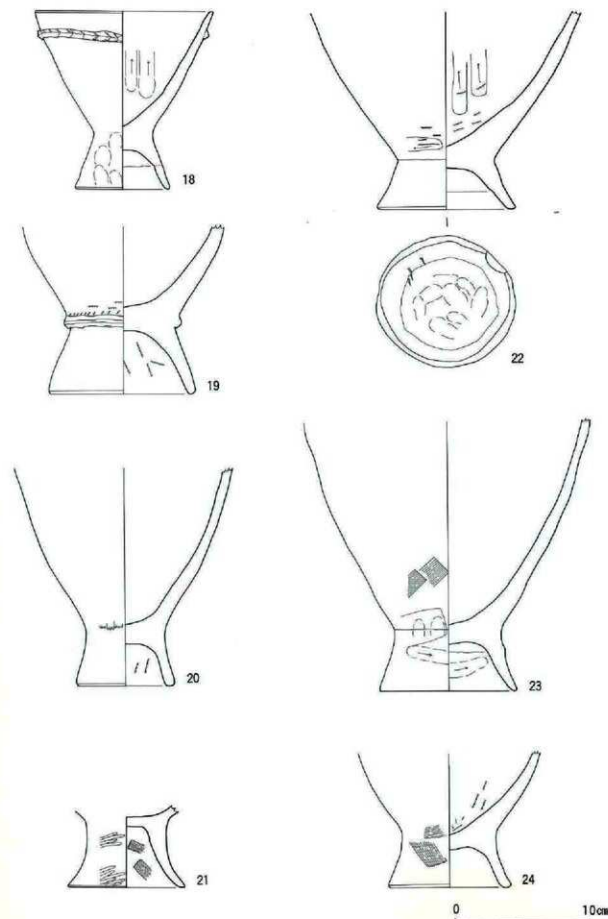
第10圖 出土遺物実測図3 (甕形土器 I b類, I c類)



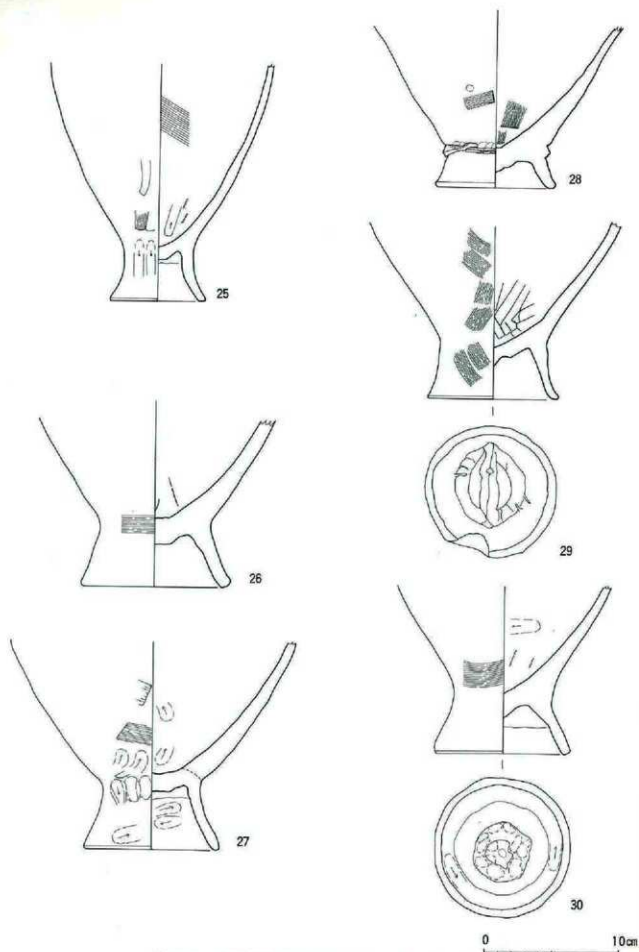
第11圖 出土遺物実測図4 (甕形土器 I c類)



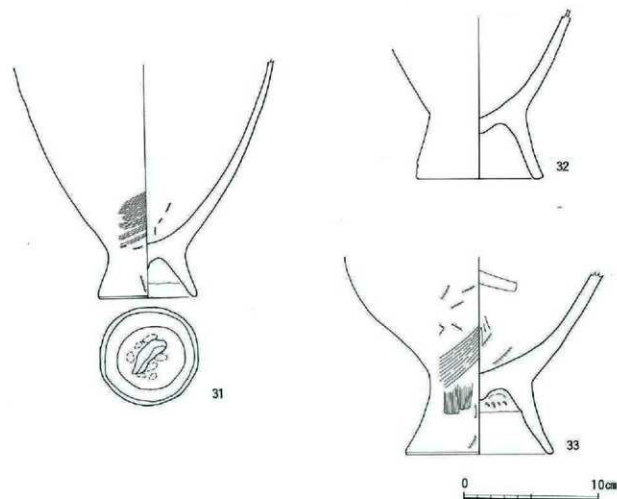
第12圖 出土遺物実測図5 (甕形土器 I c 類, I d 類, I a 類, I b 類, I c 類)



第13圖 出土遺物実測図6 (甕形土器 I c 類, II a 類)



第14図 出土遺物実測図7 (壺形土器Ⅲb類)



第15図 出土遺物実測図8 (壺形土器Ⅲc類)

Ⅲb類 (第14図25～第15図33)

脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がるか突起をもつものである。28は胴部と脚部の境目に1条の絡繩突帯を有する。

壺形土器 (第16図34～第20図54)

壺は頸部や口縁部の形状によりⅠ～Ⅹ類に分類を試みた。

Ⅰ類 (第16図34、35)

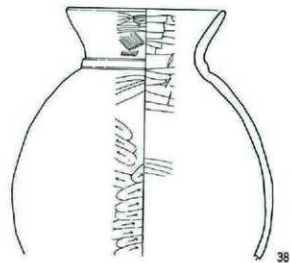
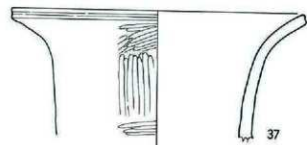
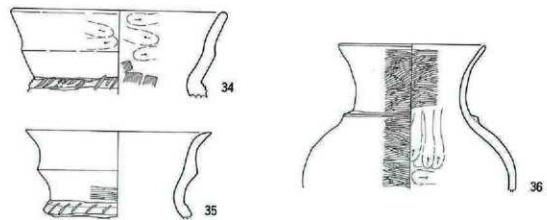
口縁部が胴部よりくの字状に外反して立ち上がり、一旦すぼまるが更にくの字状に外反して立ち上がるという二重口縁部を有するタイプである。いずれも頸部に1条の刻み目突帯を有する。

Ⅱ類 (第16図36、37)

胴部より直線的に伸び、上方はラップ状に弧を描きながら外反する口縁部を有するタイプである。36は頸部に1条の断面が緩い3角形状の突帯を有する。

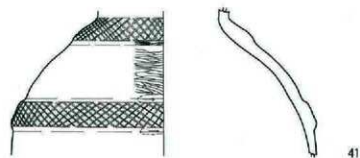
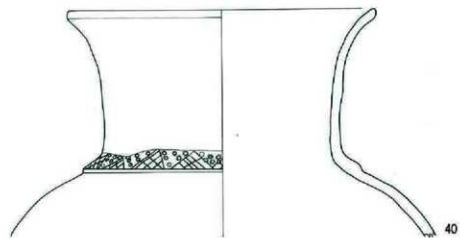
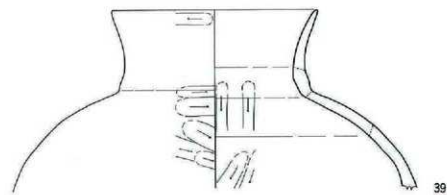
Ⅲ類 (第16図38～第16図39)

口縁部が直線的に広がるタイプである。38は頸部に1条の断面が緩い台形状の突帯を有する。



0 10cm

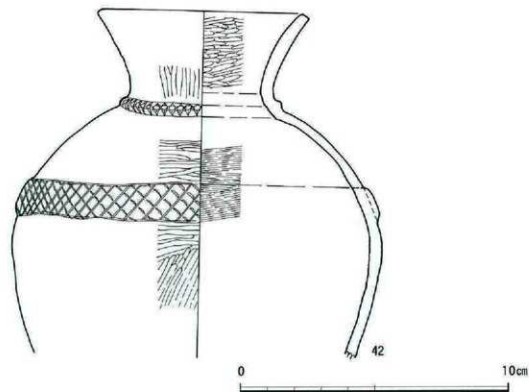
第16图 出土遺物実測図9 (壺形土器Ⅰ類~Ⅱ類)



0 10cm

第17图 出土遺物実測図10 (壺形土器Ⅱ類,Ⅳ類)





第18図 出土遺物実測図11 (甕形土器Ⅳ類)

Ⅳ類 (第17図40～第18図42)

幅の広い扁平ないわゆる幅広突帯を有するタイプである。40の文様はハの字状文に竹管文が附加されるもので、41、42はX字状に線刻が幾重にも刻まれたものである。

Ⅴ類 (第19図43、44)

頸部に1条の刻み目突帯を有するタイプである。底部は平底である。

Ⅵ類 (第19図45、46)

比較的小型で無文のものである。46は長頸を有する可能性もある。

Ⅶ類 (第19図47～第20図48)

胴部と底部が残存しているものを一括して取り扱った。いずれも平底である。47は頸部で外反するが、胴部と底部の形状から壺形土器に分類した。

Ⅷ類 (第20図49～51)

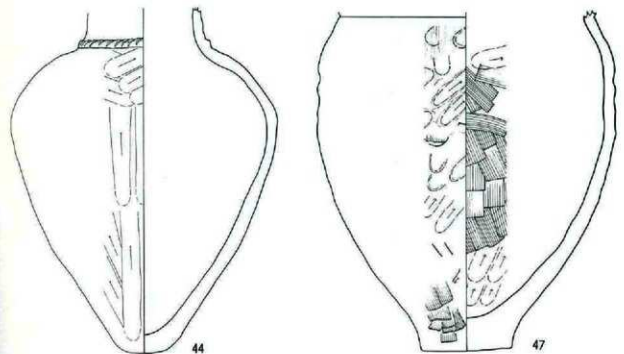
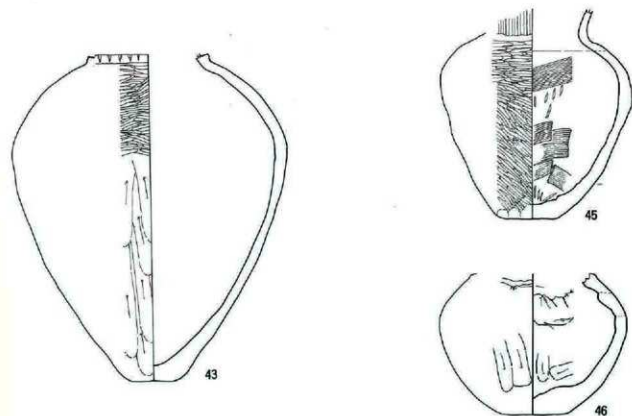
頸部を有しない、いわゆる無頸壺である。49は比較的大型で、50、51は比較的小型である。49、50の底部は平底で、51は若干丸みを帯びた底部を有する。

Ⅸ類 (第20図52、53)

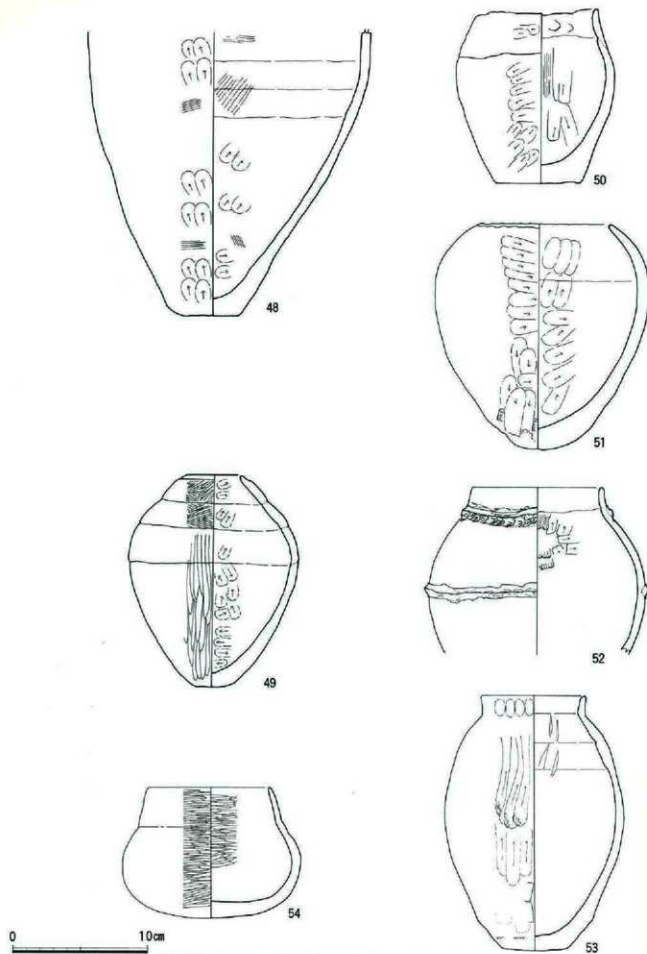
頸部が短い、いわゆる短頸壺である。52は頸部と胴部に1条ずつ絡縄突帯を有する。

X類 (第20図54)

小型の壺である。扁球状の胴部と短く内側に内湾ぎみに直行する口縁部を有する。内外共に丁寧な研磨が施されている。



第19図 出土遺物実測図12 (壺形土器Ⅴ類, Ⅵ類, Ⅶ類)



第20図 出土遺物実測図13(鉢形土器Ⅶ類, Ⅷ類, Ⅸ類, X類)

③ 鉢形土器(第21図55~第30図172)

鉢は脚の有無により大きく分けて2類に分類し(脚を有するものをⅠ類、そうでないものはⅡ類)、大きさや口縁部の形状、突帯・孔の有無により更に細分を試みた。しかし、それぞれの分類の中間的要素を有するものが多く、細分しきれていないもの、或いは他の分類に属すべきもの等がある可能性もある。

Ⅰ a 類(第21図55~58)

広口で低い脚を有するタイプである。55、56の口縁部は外反し、57、58の口縁部は内湾ぎみに直行する。

Ⅰ b 類(第21図59~第22図64)

深い杯部と高めの脚部を有するタイプである。59、60は口縁部に段を有する。61は口縁端部が若干屈曲し、外面が研磨されている。59、61の口縁部は内湾ぎみに直行する。62~64はいずれも脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。口縁部は直行あるいは内湾ぎみに直行する。

Ⅰ c 類(第22図65~第22図68)

深い杯部と低い脚部を有するタイプである。口縁部は65が直行し、66~68は内湾ぎみに直行する。67は先端へ向けて外反しながら開き、内面天井部の断面形が放物線を描く脚部を有する。

Ⅰ d 類(第23図69~72)

脚部を有するもので、小型のものである。71、72はコップ状を呈する。口縁部は69、72が内湾し、70、71は直行する。

Ⅰ e 類(第23図73~76)

胴部下方と脚部のみが残存していたものを一括して取り扱った。いずれも脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。

Ⅱ a 類(第23図77~80)

胴部に1条の刻み目突帯を有するものである。口縁部は直行するもの、内湾ぎみに直行するものがある。

Ⅱ b 類(第23図81~第24図89)

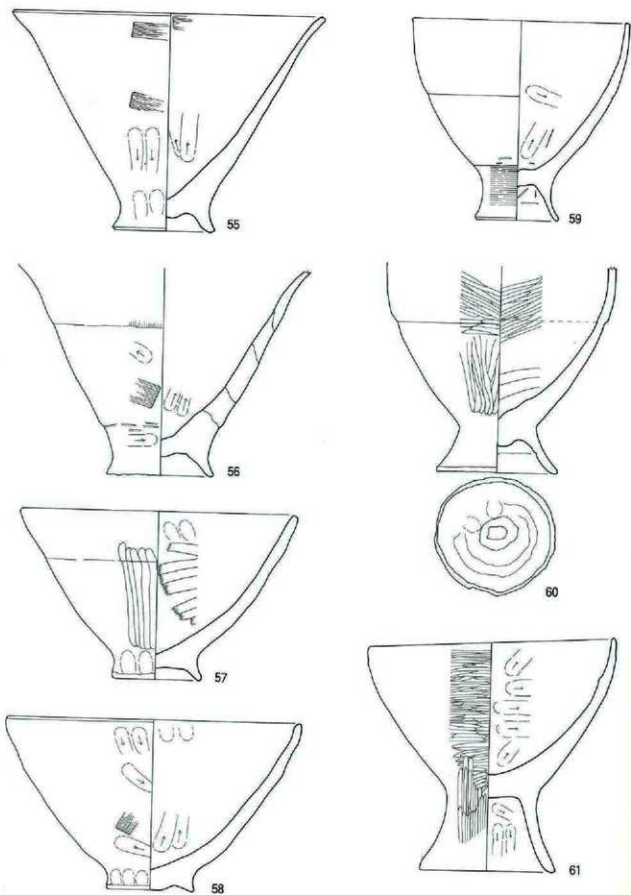
杯部に段を有し、口縁部が若干肥厚するタイプである。口縁部は直行する。84は口縁先端部が外反ぎみに直行する。

Ⅱ c 類(第24図90~第28図144)

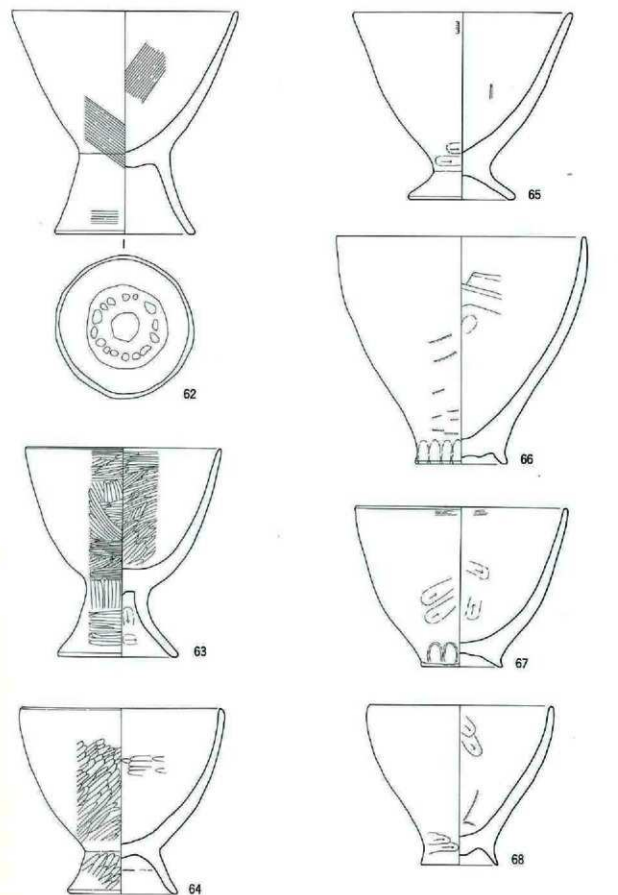
形状が一般的に鉢に分類されるものである。一括して取り扱ったが、口縁部形態、器高等に様々な種類のものがあり、更なる細分も可能であろうが、あまりに煩雑になるため今回は1つの分類に留めた。口縁部は外反するもの、外反ぎみに直行するもの、直行するもの、内湾ぎみに直行するもの、やや内湾するものがある。楕円形の底部を有するものもある。(91)

Ⅱ d 類(第28図145~第29図161)

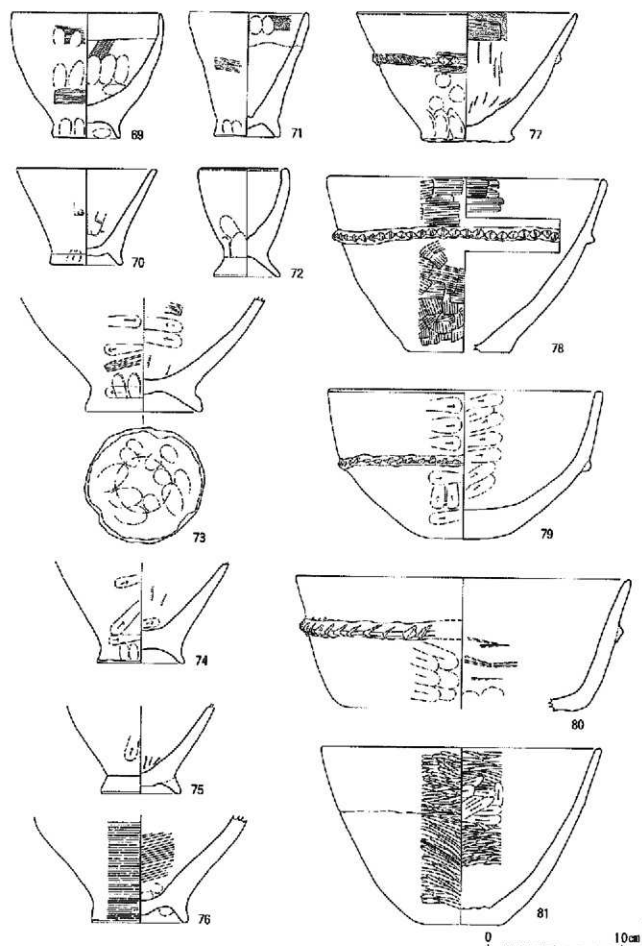
比較的小型のものである。口縁部は直行するもの、内湾ぎみに直行するもの、やや内湾するものがある。ミニチュア土器に分類されるべきものが含まれている可能性もある。



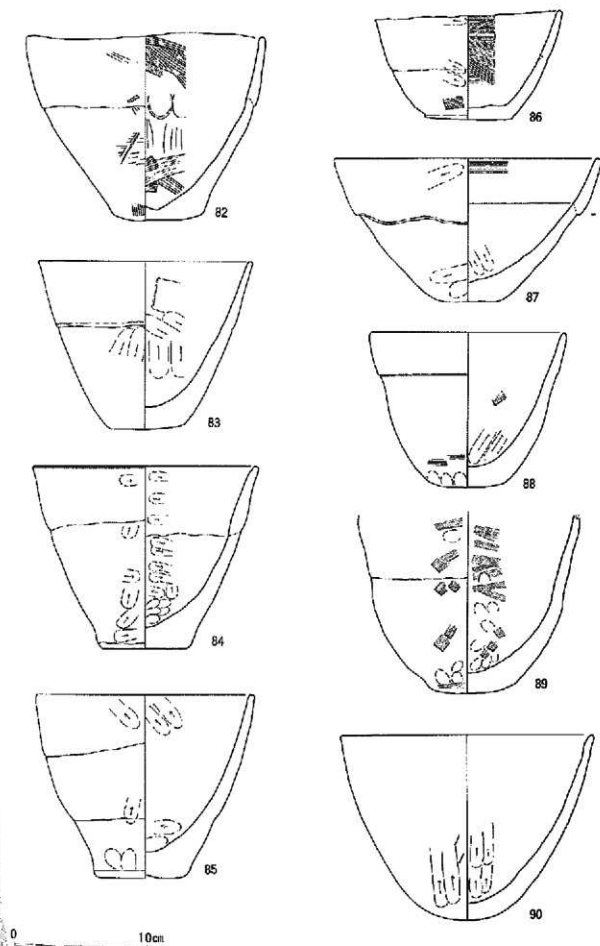
第21图 出土遺物実測図14 (鉢形土器 I a 類, I b 類)



第22图 出土遺物実測図15 (鉢形土器 I b 類, I c 類)

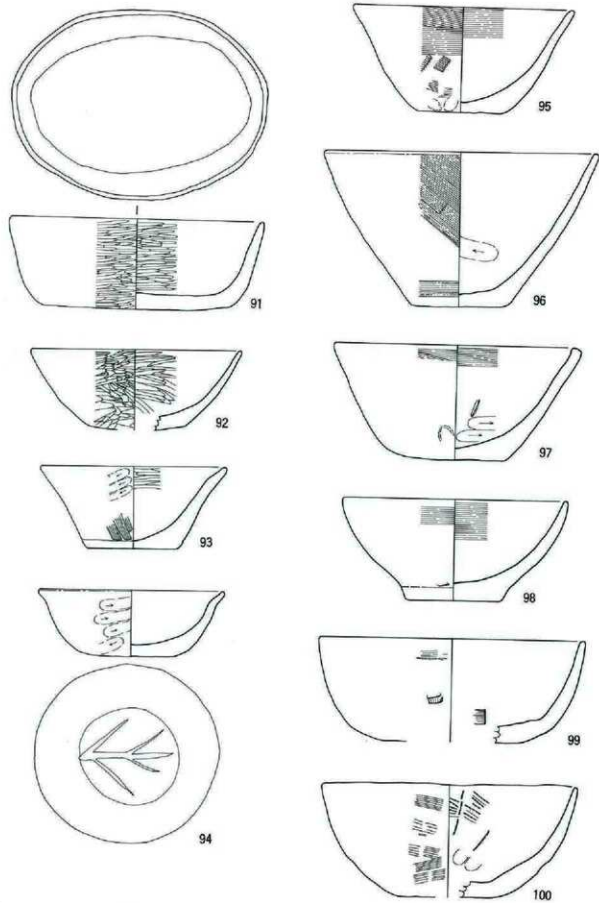


第23图 出土文物实测图16 (鉢形土器 I d 類, I e 類, II a 類, II b 類)

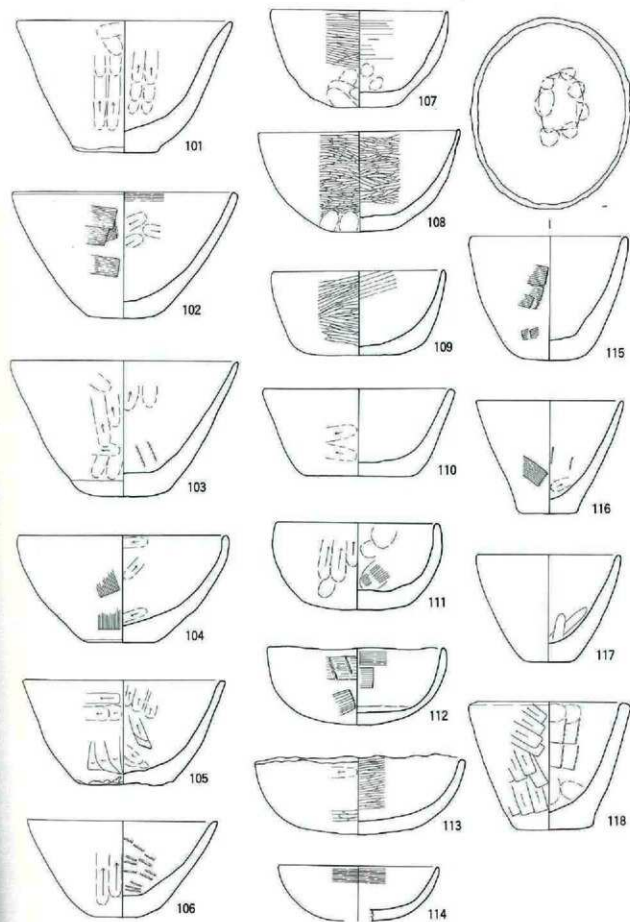


第24图 出土文物实测图17 (鉢形土器 II b 類, II c 類)

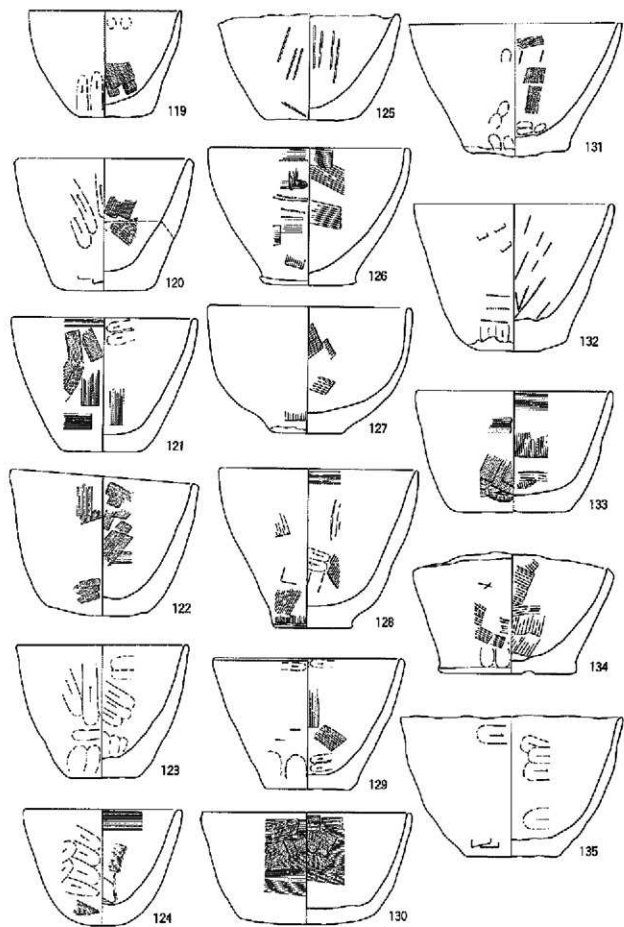




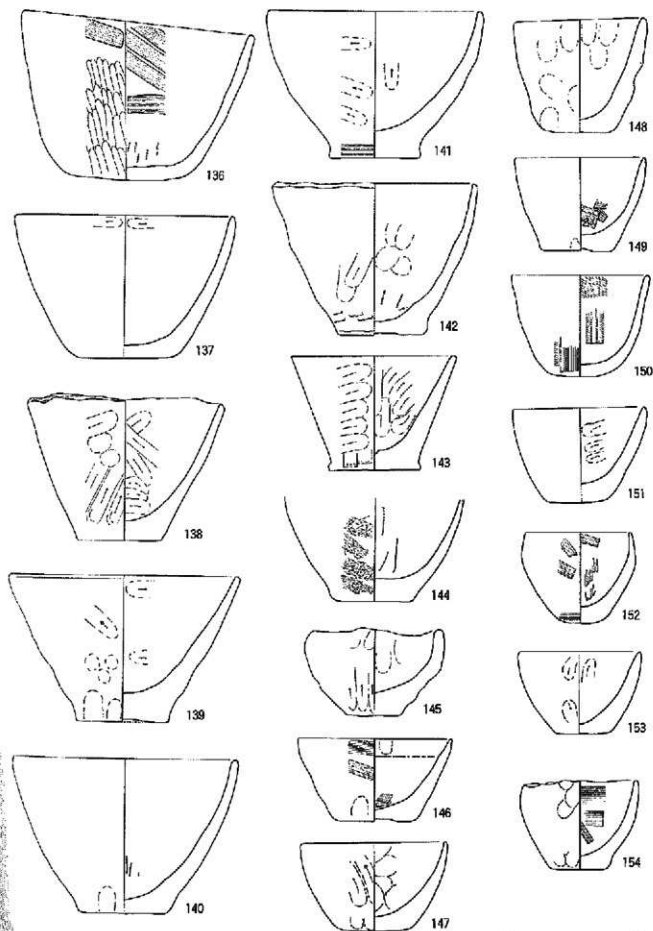
第25图 出土文物实测图18 (斝形土器Ⅱc類)



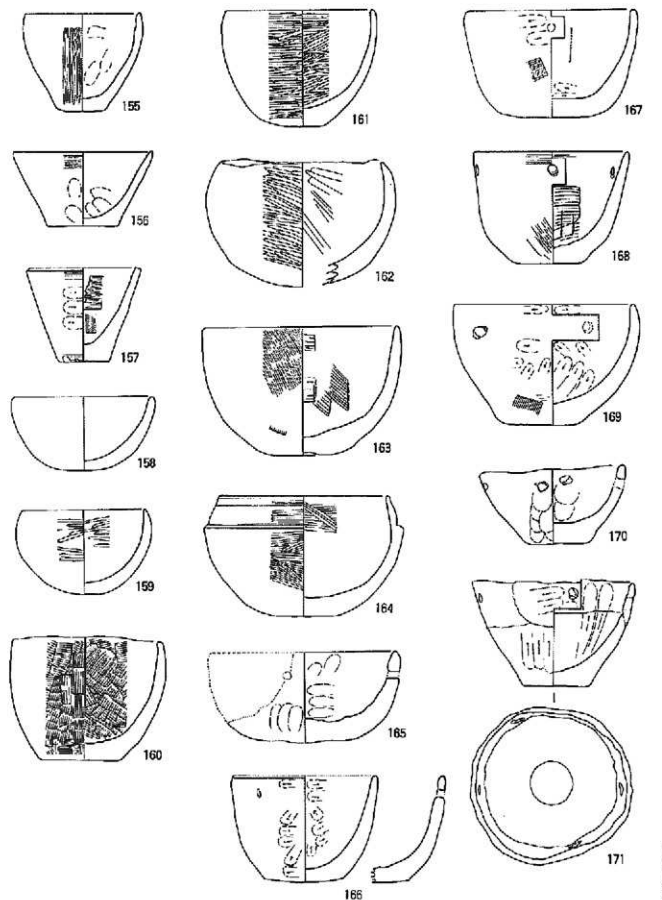
第26图 出土文物实测图19 (斝形土器Ⅱc類)



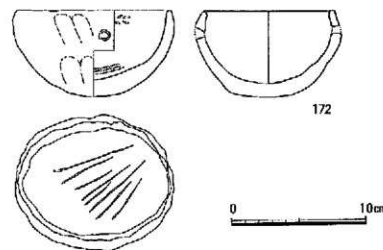
第27图 出土遺物実測図20 (鉢形土器Ⅱc類)



第28图 出土遺物実測図21 (鉢形土器Ⅱc類, Ⅱd類)



第29図 出土遺物実測図22 (鉢形土器 II d 類, II e 類, II f 類)



第30図 出土遺物実測図23 (鉢形土器 II e 類)

II e 類 (第29図162~164)

口縁部が内湾するものである。164は内外共に丁寧な研磨が施されており、精緻である。口縁部に段がついて、須恵器杯の形に似て類似している。

II f 類 (第29図165~第30図172)

口縁部に2つないし4つの孔を有するものである。口縁部は直行するもの、やや内湾するもの、内湾するものがある。

④ 高杯形土器 (第31図173~第33図202)

高杯は、口縁部の形状、突帯の有無等により I~III 類に分類を試みた。外面あるいは内外面共に研磨を施された精緻なつくりのものが多い。

I 類 (第31図173~175)

杯部に段を有するものである。内外面あるいは外面に丁寧な研磨を施す。口縁部の形態は直行するもの、内湾ぎみに直行するもの、内湾するものがある。

II 類 (第31図176~179)

杯部に屈曲を持つタイプである。I 類ほど明確な段は有しない。磨耗が激しいが外面は研磨が施されていたと確認できる。176は丹塗りである。口縁部は直行する。

III 類 (第31図180~第32図185)

杯部に段も屈曲も有しないものである。口縁部はやや内湾するもの、直行するもの、外面するものがある。内面あるいは内外面が研磨されているものが多い。183~185は丹塗りである。

IV 類 (第32図186~190)

杯部に1条の断面が鋭い三角形状の突帯を有するものである。口縁部は内湾するもの、直行するものがある。内外面共に研磨されている。

V 類 (第32図191~194)

口縁端部がくの字状に屈曲して直立または内傾するタイプである。内外面共に研磨されている。

VI 類 (第33図195、196)

口縁端部に段を有するタイプである。195は黒塗りである。196は段部に刻み目が1条廻る。両者

とも内外面に丁寧な研磨が施されている。

Ⅴ類 (第33図197-202)

総體文を有するタイプである。198は器の内外面に丁寧な研磨が施されており、おそらく他のものも同様に丁寧な研磨が施されてあったと思われる。口縁部は直行するもの、外反ぎみに直行するものがある。

Ⅵ類 (第34図202)

碗状の杯部と高い脚をもちワイングラス状の外観を呈するものである。外面は研磨されている。

⑤ 埴 (第34図203-第34図208)

埴は胴部と頸部の形状から2類に大別し、孔の有無等から更に細分を試みた。胴部のみが残存しているものは一括してⅢ類として取り扱った。完形でないものは残存部からそれぞれ推定して分類している。

I a類 (第34図203-208)

平底で強い屈曲を持つ胴部とやや内湾する口縁部を有するものである。外面に研磨を施したものが多く、209は長い頸部を有する。

I b類 (第34図209)

I a類と同様の器形を有し、胴部に孔があるもので、孔は縁の須恵器の影響を受けていると思われる。

II a類 (第34図210-212)

扁球状の胴部と長い頸部を有するタイプである。外面と口縁部にちかいい内面は研磨されている。210、212は丹塗りである。注目されるのは211で、黒塗りで極めて精緻に作られている。頸部には1条の刻み目突帯を有し、口縁部にも刻み目が1条走る。

II b類 (第34図213)

器形はII a類と同様であるが、I b類と同様胴部に孔が穿たれている。外面は研磨されている。

III a類 (第34図214-216)

胴部のみが残存しているものうち、張りのある層を有し平底のものである。いずれも丹塗りで外面が研磨されている。

III b類 (第34図217)

球形の胴部に緩い腹線を有するタイプである。平底で外面は研磨されている。

III c類 (第35図218)

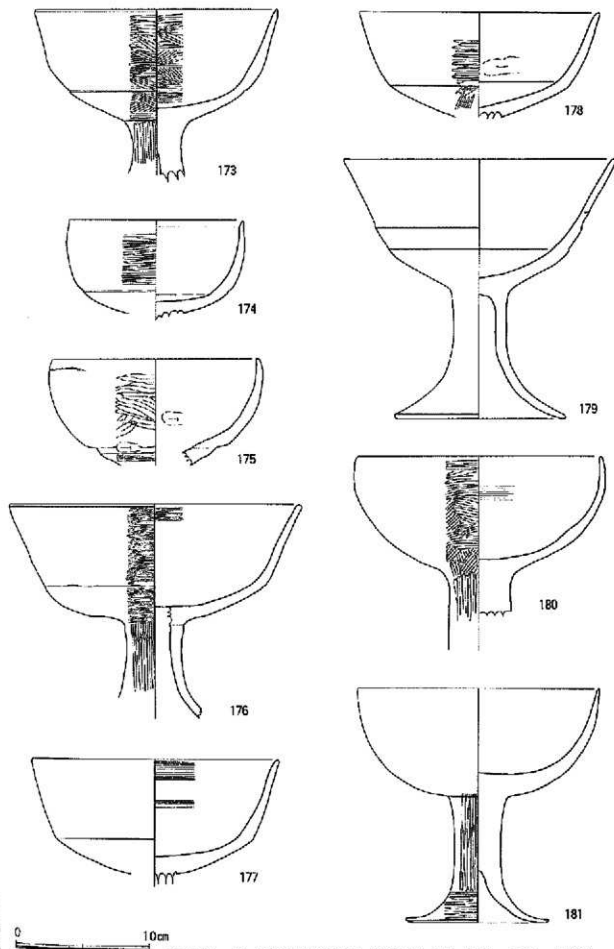
扁球状でやや下膨れの胴部を有するタイプである。

⑥ ミニチュア土器 (第35図219-第37図266)

ミニチュア土器は突帯を有するものをI類、脚を有するものをII類と分類し、その他のものは一括してⅢ類として取り扱った。

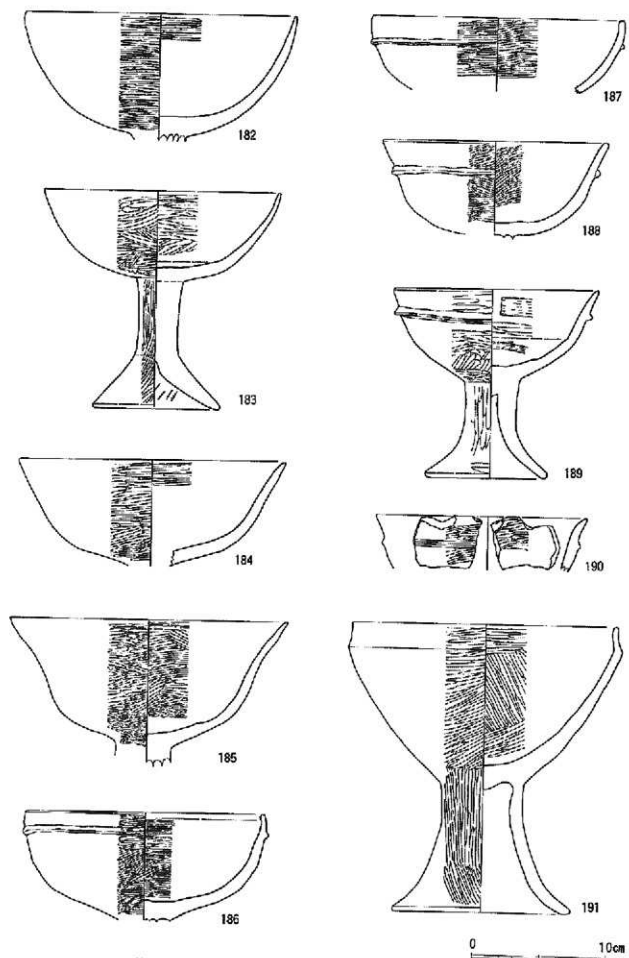
I a類 (第35図219-222)

胴部に1条の突帯を有するもので、脚を持つものである。その形状から、壺を模したものである。219は断面が緩い三角形の突帯、220は刻み目突帯、221、222は絡縄突帯を有する。口縁部はやや内湾するものと直行するものがある。

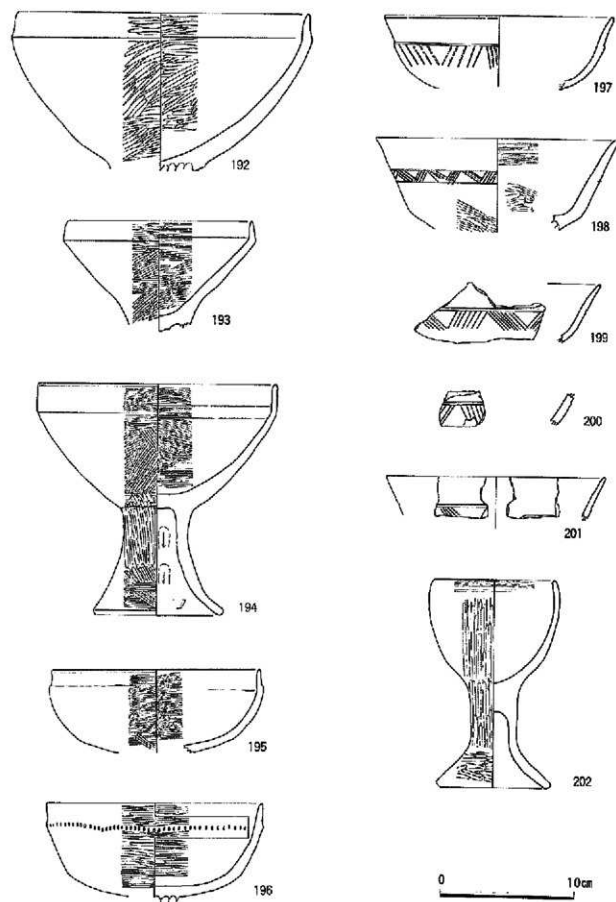


第31図 出土遺物実測図24 (高杯形土器I類, II類, III類)

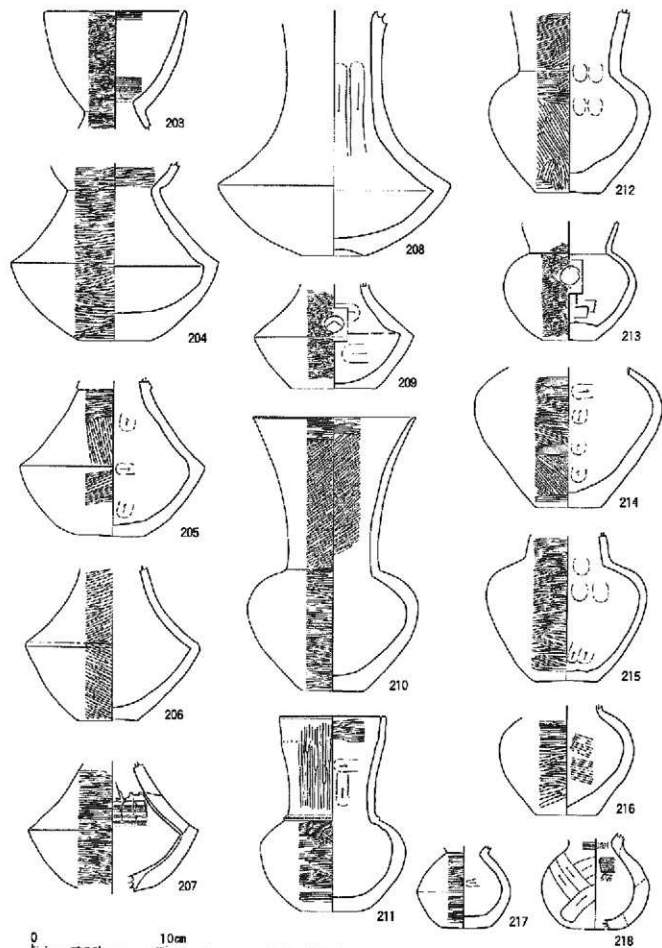




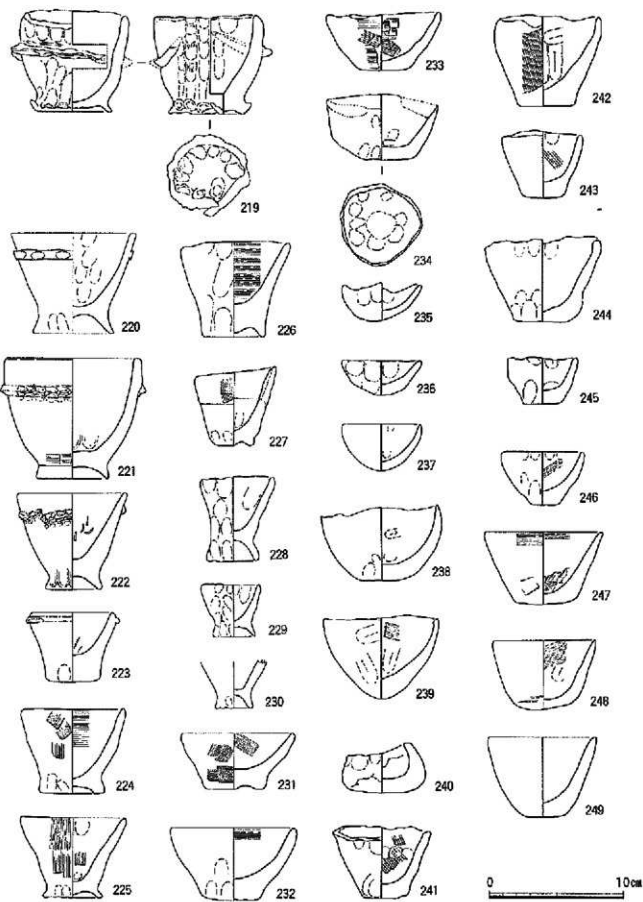
第32图 出土文物实测图25 (高杯Ⅲ类, Ⅳ类, Ⅴ类)



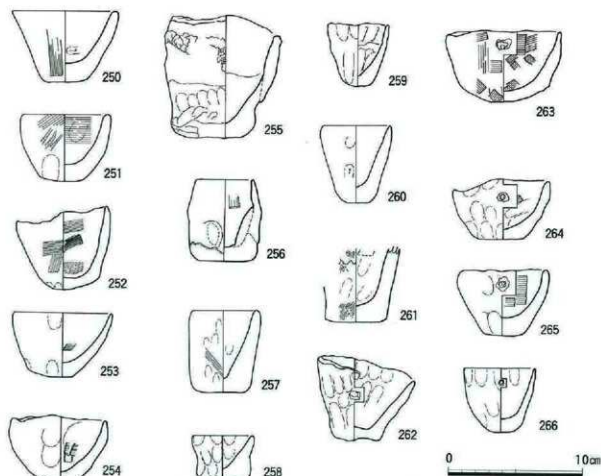
第33图 出土文物实测图26 (高杯Ⅵ类, Ⅶ类, Ⅷ类, Ⅷ类)



第34图 出土遺物実測図27 (埴I a類~II c類)



第35图 出土遺物実測図28 (ミニチュア土器I a類, I b類, II類, II a類, II b類)



第36図 出土遺物実測図29 (ミニチュア土器Ⅲb類, Ⅲc類, Ⅲd類)

Ⅰb類 (第35図223)

口縁部に1条の断面が緩い台形状の突帯を有するものである。口縁部は直行する。

Ⅱ類 (第35図224~230)

脚を有するもので無文のものである。口縁部はやや内湾ぎみあるいは外反ぎみに直行する。

Ⅲa類 (第35図231~240)

一般的に手捏ねと呼ばれるもので、比較的広い口縁部を有するタイプである。口縁部は直行するもの、内湾ぎみに直行するもの、内湾するものがある。

Ⅲb類 (第35図241~第36図254)

手捏ねのうち碗状のものである。口縁部は直行するもの、やや内湾するものがある。

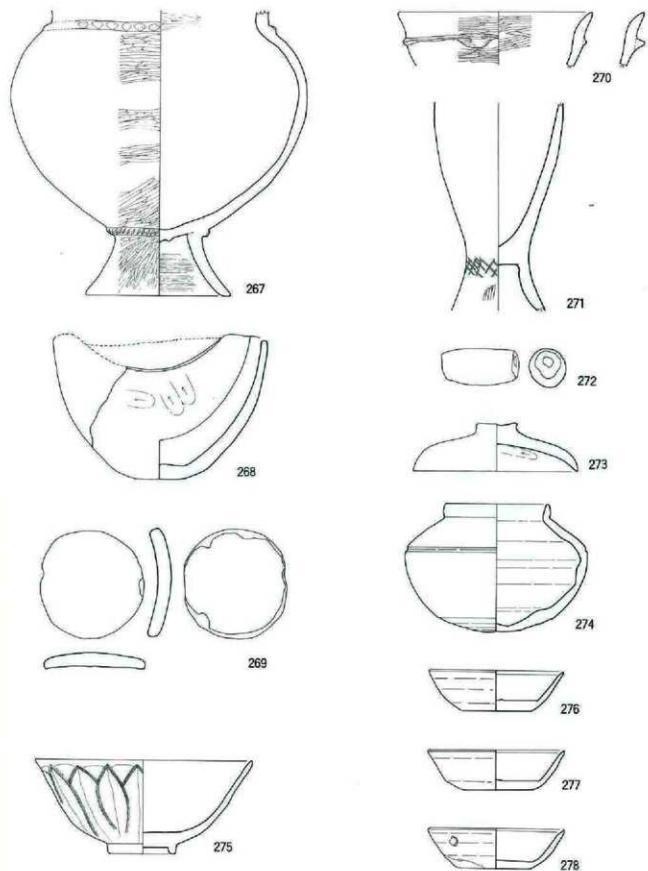
Ⅲc類 (第36図255~261)

手捏ねのうち比較的細身のタイプである。口縁部は直行するもの、やや内湾ぎみに直行するものがある。

Ⅲd類 (第36図262~266)

手捏ねのうち孔を有するものである。口縁部は直行するもの、やや内湾するものがある。

⑦ その他の土器 (第37図267~272)



第37図 出土遺物実測図30 (その他の土器, 土師器、須恵器、青磁、白磁)

上記の分類に属さないもの、あるいは器種不明のである。267は脚部を有する壺状の外観を呈する。頸部と脚部の境目にそれぞれ1条の刻目突帯を有する。胴部は球状で脚部は先端へ向けてやや反反ぎみに開き、内面天井部に突起を持つ。器の外表面と内面の口縁部付近は丁寧に研磨されており、全体に精緻な作りである。なお、この個体と同一個体と考えられる口縁部片が出土したが、それによると直線的に広がる壺形土器型類と同様の口縁である。268は鉢であるが、口縁の一部が緩く湾曲して下るものである。269は口蓋状の土板で、いわゆるメンコである。270は断面が幅広い三角形の突帯が付いた高杯の外観を呈するもので、器は内外面に研磨されている。突帯の一部がこぶ状に厚層している。器の内外面に研磨されている。271はコップ状の外観を呈するもので、胴部と脚部の境目にX字状の沈線が幾重にも施されている。脚の内面天井部に平坦面をもつ。丹塗りで器の外表面は研磨されている。272は中空の円柱状を呈するもので、土鐘である。

⑧ 土師器 (第37図273)

273は土師器で、杯蓋と思われる。

⑨ 須恵器 (第37図274)

274は須恵器で、半球状の胴部と直行する短頸を有する。底部には回転ヘラ削りが認められる。頸部下端から胴部上面にかけて自然釉が認められる。

⑩ 青磁 (第37図275)

275は青磁である。外反する口縁部と、断面四角形の高台を有し、高台内は無釉である。胴部には連弁溝が施されており、13世紀頃の電泉系系青磁と考えられる。

⑪ 白磁 (第37図276-278)

276-278は白磁である。口縁部は直行する。口唇部が無釉の口元である。

第7表 出土土器観察表 (1)

(S=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=虫卵)

編年	図号	器種	部位	胎土	色		器面調整		施釉	口縁	器高	備考
					内	外	内	外				
8	1	土	蓋	S.C.K	明黄褐色	黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	27.2	32	
	2	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	にぶい藍色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	27.2	32	突帯付
9	3	土	蓋	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	11		突帯付
	4	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	にぶい藍色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	28.3		突帯付、横切石
10	5	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色、緑い褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	12.6		突帯付
	6	土	蓋	S.C.K	赤	明赤褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	13.4	14.5	突帯付
11	7	土	蓋	S.C.K			ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	12.6		突帯付
	8	土	蓋	S.C.K			斜めにナデ		良	15	19.8	突帯付
12	9	土	蓋	S.C.K			ハケ後ナデ		良	31		突帯付
	10	土	蓋	S.C.K			高杯の打ち込み	ハケ打ち込み	良	21		突帯付
12	11	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	にぶい藍色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			突帯付
	12	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	にぶい藍色	にガキ	にガキ	良	28		突帯付

第8表 出土土器観察表 (2)

(S=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=虫卵)

編年	図号	器種	部位	胎土	色		器面調整		施釉	口縁	器高	備考
					内	外	内	外				
13	13	土	蓋	S.C.K	明赤褐色	褐色	ハケ後ナデ	ナデ・ミガキ	良	16	14.9	突帯付
	11	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	17.4	20.1	突帯付
12	15	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	にぶい藍色	エビナデ	エビナデ	良	13.9	13.6	突帯付
	16	土	蓋	S.C.K			ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			突帯付
17	17	土	蓋	S.C.K	明褐色	褐色	ナ	ナ	良	18.4	16.9	突帯付
	18	土	蓋	S.C.K	褐色	明赤褐色	粗いナデ	粗いナデ	良	23.2	13.3	突帯付、横切石
19	19	土	蓋	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			突帯付
	20	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	色	打ち込み	良			
13	21	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ミガキ	良			横切石
	22	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			
23	23	土	蓋	S.C.K	明褐色	明褐色	ハケ後ナデ	ナ	良			
	24	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	打ち込み	ハケ後ナデ	良			
25	25	土	蓋	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ハケ後ナデ	ナ	良			
	26	土	蓋	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ハケ打ち込み	ハケ後ナデ	良			横切石
14	27	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			
	28	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			突帯付
29	29	土	蓋	S.C.K	赤褐色	赤褐色	ハケ後ナデ	ヨコナデ	良			
	30	土	蓋	S.C.K	赤褐色	赤褐色	ナ	ハケ後ナデ	良			
31	31	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	赤褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			
	32	土	蓋	S.C.K	明褐色	明褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			
15	33	土	蓋	S.C.K	にぶい藍色	にぶい藍色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良			横切石
	34	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	15		突帯付、横切石
16	35	土	蓋	S.C.R	褐色	褐色	ナ	ナ	良	14		突帯付
	36	土	蓋	S.C.K	赤褐色	赤褐色	口縁ミガキ	ミガキ	良	11		突帯付、突帯付
37	37	土	蓋	S.C.K	浅黄褐色	浅黄褐色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	良	7.9		
	38	土	蓋	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	エビナデ	エビナデ	良	17.6		
19	39	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ナ	良	8.4		一部残存
	40	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
18	41	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	15.0		突帯付
	42	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
43	43	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
	44	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
19	45	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
	46	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
47	47	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
	48	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
49	49	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
	50	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
20	51	土	蓋	S.C.R	褐色	褐色	ナ	ナ	良	9.2	12.7	一部残存
	52	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	9.6		突帯付
53	53	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	7.9	19.1	一部残存
	54	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	8.9	9.8	一部残存
55	55	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	23.4	16.3	一部残存
	56	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良			突帯付
21	57	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	20.8	12.5	内面残存
	58	土	蓋	S.C.K	褐色	褐色	ナ	ナ	良	28.8	12.7	一部残存



第9表 出土土器観察表(3)

(S=石炭, C=長石, K=角四石, R=小石, U=空使)

編年	器種	器名	器色	胎土		色		胎土		口徑	底徑	備考	
				内	外	内	外	内	外				
21	59	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ミガキ	ミガキ	キ	長	16.2	14.9	底面黒褐色
	60	I 皿鉢	S.C.S	にぶい褐色	褐色	褐色	ハケ後ナデ	ナ	ナ	長	18.4	17.1	
	61	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ユビナデ	ミガキ	キ	長	17.1	16.7	
	62	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ハケ後ナデ	ナ	長	17.1	16.7	
	63	I 皿鉢	S.C.K	部分の黒褐色	褐色	褐色	ナ	ハケ後ナデ	ナ	長	14.6	15.7	
	64	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ハケ後ナデ	ミガキ	キ	長	2.7	15.8	
	65	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	ナ	長	16.4	14	
	66	I 皿鉢	S.C.K	赤褐色	赤褐色	色	胎土調査	胎土調査	胎土調査	長	16.8	14	底面黒色
	67	I 皿鉢	S.C.K	赤褐色	赤褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	ナ	長	15.8	12	
	68	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	ナ	長	14.4	11.9	
22	69	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ナ	長	11.4	9.4	一部黒付着	
	70	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	10.6	7.6		
	71	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	9	9.3		
	72	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ナ	長	6.4	8.2		
	73	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	横方向ナデ	ナ	ナ	長			一部黒付着
	74	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	ナ	長			一部黒付着
	75	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ハケ後ナデ	全体にナデ	ナ	長			一部黒付着
	76	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	横方向ナデ	横方向ナデ	長				一部黒付着
	77	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	16.8	9.6	裏面黒褐色	
	78	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	21.2	13	交響付着	
23	79	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	20.6	11.1	交響付着	
	80	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	25.3	19.9	交響付着	
	81	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ハケ後ナデ	ミガキ	キ	長	20.9	13.2	裏面黒褐色
	82	I 皿鉢	S.C.K	赤褐色	赤褐色	色	ナ	ナ	長	18	15.8		
	83	I 皿鉢	S.C.K	赤褐色	赤褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	18	12.6		
	84	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	にぶい褐色	にぶい褐色	長	8.5	13.6		
	85	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	16.4	13.7	交響付着	
	86	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	14	7.6		
	87	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	横方向ナデ	横方向ナデ	長	20.1	10.5	一部黒付着	
	88	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	14.8	11.6		
24	89	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	19.3	18.8		
	90	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	19	6.8	底面黒色	
	91	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ナ	長	16	6		
	92	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	18.8	6.1	底面黒付着	
	93	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	14	5	一部黒付着	
	94	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	14	5	一部黒付着	
	95	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	にぶい褐色	にぶい褐色	長	16.6	9		
	96	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	20.3	11.6	裏面アリ	
	97	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	18.6	8.6		
	98	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	6.5	7.6		
25	99	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	10	7.7		
	100	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	9.6	8.5		
	101	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	16.2	8.9		
	102	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	8.3	9.5		
	103	I 皿鉢	S.C.S	にぶい褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	ナ	長	8.6	10.1	一部黒付着
	104	I 皿鉢	S.C.K	にぶい褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	16	8	底面黒褐色	

第10表 出土土器観察表(4)

(S=石炭, C=長石, K=角四石, R=小石, U=空使)

編年	器種	器名	器色	胎土		色		胎土		口徑	底徑	備考
				内	外	内	外	内	外			
26	105	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	15.2	7.8	
	106	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	長	14.4	7.2	
	107	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	横方向ナデ	横方向ナデ	長	13.4	7.5	
	108	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	横方向ナデ	横方向ナデ	長	13.4	7.5	
	109	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ナ	長	13.4	6.5	底面黒付着
	110	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ナ	長	13.4	6.5	底面黒付着
	111	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ナ	ナ	長	13.4	6.5	底面黒付着
	112	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	6.1	9.5	
	113	I 皿鉢	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	13.8	5.8	
	114	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	9	5.7	
27	115	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	12	4.1	
	116	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	14.2	9.3	
	117	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	11	6.5	
	118	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	10.8	8	
	119	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	12.1	9.6	
	120	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	11.4	8	
	121	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	13.4	9.9	
	122	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	14	10	
	123	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	14.1	10.5	
	124	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	9.3	12.1	
28	125	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	12	8.7	
	126	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	13.5	8	部分付着
	127	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	15.7	10.3	
	128	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	15.6	9.6	
	129	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	14.5	11.9	部分付着
	130	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	14.4	9.9	
	131	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	15.8	8.9	
	132	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	16	10	
	133	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	15	11	
	134	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	14.9	9	底面中央欠落
29	135	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ナ	長	15	9	一部黒付着
	136	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	16.4	10.4	
	137	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	17.6	12.7	
	138	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	16.5	10.7	
	139	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	14.4	8.5	一部黒付着
	140	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	8.8	10.5	
	141	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	17	11.9	
	142	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	長	16	11	
	143	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	15.5	11.3	
	144	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ユビナデ	ユビナデ	長	12.4	8.5	部分付着
30	145	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	10	5.8	
	146	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	11	6.2	
	147	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	11	6.5	
	148	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	10	7	
	149	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	9.8	7.1	
	150	I 皿鉢	S.C.K	褐色	褐色	色	ナ	ナ	長	10.4	7.6	

第11表 出土土器観察表(5)

(S=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=炭素)

標本 番号	器種	部位	土質	色				観察調査				口径	高さ	備考
				内		外		内		外				
				色	調	色	調	色	調	色	調			
151	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	9.6	7.1		
152	I	口縁	S.C.K	にぶい褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	9	6.8		
153	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	9.2	6.1		
154	I	口縁	S.C.R	にぶい褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	6.8	6.6		
155	I	口縁	S.C.R	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	9	7.3		
156	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良	10.4	5.8		
157	I	口縁	S.C.K	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	良	8.5	6.9		
158	I	口縁	S.C.K	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	良	10.6	6.5		
159	I	口縁	S.C.K							良	9.2	5.4	染織り	
160	I	口縁	S.C.K							良	11.9	9.2		
161	I	口縁	S.C.K	にぶい褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	10.6	8.7	底部彫付	
162	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	12.1	9.4		
163	I	口縁	S.C.K							良	15	9.6		
164	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	12.8	7	底部彫付	
165	I	口縁	S.C.K	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	淡黄褐色	良	13.8	6.8		
166	I	口縁	S.C.K	にぶい褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	11	8	孔アリ	
167	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	11.5	9	孔アリ	
168	I	口縁	S.C.K							良	11.6	8.2	底部彫付	
169	I	口縁	S.C.K	灰褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良	11.5	9	孔アリ	
170	I	口縁	S.C.K							良	10.9	5.8	孔アリ	
171	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良	6	7.8	孔アリ	
172	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良	11.8	6.5	孔アリ	
173	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	18.2		一部染織り	
174	I	口縁	S.C.K	灰黄褐色	灰黄褐色	灰黄褐色	灰黄褐色	灰黄褐色	灰黄褐色	良	18			
175	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	15			
176	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良	21		染織り	
177	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良	18.6			
178	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	18			
179	I	口縁	S.C.K	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	良	18.2		一部染織り	
180	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	18.4		一部染織り	
181	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	18.2	17.5		
182	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	20.4			
183	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	18.4	16.3	染織り	
184	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	10		染織り	
185	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	20.8		染織り	
186	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	17.8		染織り	
187	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	19		染織り	
188	I	口縁	S.C.K	にぶい褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	17		染織り	
189	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	16		染織り	
190	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	14.6		染織り	
191	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	19.2	21.5		
192	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	22			
193	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	13.8		染織り	
194	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	18	17.3		
195	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	7.8			

第12表 出土土器観察表(6)

(S=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=炭素)

標本 番号	器種	部位	土質	色				観察調査				口径	高さ	備考
				内		外		内		外				
				色	調	色	調	色	調	色	調			
196	I	口縁	S.C.K	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	良	16.2			
197	I	口縁	S.C.K							良	17		底部彫付	
198	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	18.2		底部彫付	
199	I	口縁	S.C.K							良	16.8			
200	I	口縁	S.C.K	にぶい褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良				
201	I	口縁	S.C.K							良				
202	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	9	19.5		
203	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	10.4			
204	I	口縁	S.C.K							良			底部彫付	
205	I	口縁	S.C.K							良				
206	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良			底部彫付	
207	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良			底部彫付	
208	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良				
209	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良			底部彫付	
210	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	12.5	20.5		
211	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	8	14.6	底部彫付	
212	I	口縁	S.C.K							良			染織り	
213	I	口縁	S.C.K							良			孔アリ	
214	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良			染織り	
215	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良			ニブイ	
216	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良			染織り	
217	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良			染織り	
218	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良				
219	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	7.6	7.2	染織り	
220	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	9.9	7.5	染織り	
221	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	10	9	染織り	
222	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	8.2	7.2	染織り	
223	I	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	良	5.8	5.5	染織り	
224	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	7.6	8.3		
225	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	7.8	6		
226	I	口縁	S.C.K							良	8	7		
227	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	6	6		
228	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	5	6.3		
229	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	4.3	4	底部彫付	
230	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良				
231	I	口縁	S.C.K							良	8.2	4.2		
232	I	口縁	S.C.K							良	9	5.4		
233	I	口縁	S.C.K							良	8.6	4.5		
234	I	口縁	S.C.K	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	良	8.8	5		
235	I	口縁	S.C.K							良	5.4	2.9		
236	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	6	2.6		
237	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	5.8	3.5		
238	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	8.6	6.4		
239	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	8.3	6.2		
240	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	4.8	3.7		
241	I	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	良	7.3	5.4		

第13表 出土土器類表(7)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

編年 層別	出土 位置	器種	部位	土質	色調		器面状態		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
242	I	■	口縁	S.C.K			指環ナナ	ハナ後ナナ	良	7.3	6.8
243	I	■	口縁	S.C.K			ハナ後ナナ		良	6	6
244	I	■	口縁	S.C.K			赤帯さえ		良	8.7	6.1
245	I	■	口縁	S.C.K	にぶい褐色		指環	指環	良	5.1	3.5
246	I	■	口縁	S.C.K	紫褐色	赤帯・赤色	指環さえ		良	6.2	4
247	I	■	口縁	S.C.K	にぶい褐色		ハナ・打込み	横方向ナナ	良	8.9	5.4
248	I	■	口縁	S.C.K	紫・黒い褐色	鈍い褐色	ハナ後ナナ	指環淡紫	良	7.4	3.2
249	I	■	口縁	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			良	8	5.3
250	I	■	口縁	S.C.K			ハナ後ナナ		良	8	5.6
251	I	■	口縁	S.C.K	褐色	にぶい褐色	ハナ後ナナ		良	6.6	5
252	I	■	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	蛇脚筋帯	指環	良	7	5.8
253	I	■	口縁	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	底面エビナ		良	7.4	4.8 黒帯アリ
254	I	■	口縁	S.C.K			指環	指環	良	7.3	4.9
256	I	■	口縁	S.C.K	褐色	褐色	縁面エビナ	エビナ	良	7.0	8.6 突帯アリ
256	I	■	口縁	S.C.K	褐色	褐色			良	4.2	6.1 一筋溝付
257	I	■	口縁	S.C.K	褐色	褐色		エビナ	良	4.9	6.1
258	I	■	口縁	S.C.K	明茶褐色	茶褐色	断面調整	断面調整	良	4.6	3.2
259	I	■	口縁	S.C.K			エビナ	エビナ	良	4.6	4.7
260	I	■	口縁	S.C.K	淡褐色	褐色	ハナ後ナナ	ハナ後ナナ	良	5.4	5.8
261	I	■	口縁	S.C.K			ナ	ナ	良		
262	I	■	口縁	S.C.K			エビナ	エビナ	良	9.3	8.3 孔アリ
263	I	■	口縁	S.C.K			ハナ後ナナ	ハナ後ナナ	良	8.8	5.3 孔アリ
264	I	■	口縁	S.C.K	紫褐色	赤褐色	エビナ	エビナ	良	7.2	4.6 孔アリ
265	I	■	口縁	S.C.K			ハナ後ナナ	断面調整	良	6.5	4.8 孔アリ
269	I	■	口縁	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	指環調整	断面調整	良	5.3	4.6 孔アリ
287	I	■	口縁	S.C.K	灰赤	にぶい褐色		ミガキ			
288	I	■	口縁	S.C.K	淡黄褐色	淡黄褐色	エビナ			16	10 外面磨付
289	I	■	口縁	S.C.K							
270	I	■	口縁	S.C.K	緑	紫	柄			14	突帯アリ
271	I	■	口縁	S.C.K	赤	紫	柄	ミガキ			浮付
272	I	■	口縁	S.C.K			にぶい褐色				土蝕

第14表 出土土器観察表(1)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

編年 層別	出土 位置	器種	部位	土質	色調		器面状態		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
37	273	I	口縁		淡黄褐色	淡黄褐色	エビナ		良	12.2	3.6

第15表 出土須恵器観察表(1)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

編年 層別	出土 位置	器種	部位	土質	色調		器面状態		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
37	274	I	蓋		灰	内灰	白		良	7.7	9.5

第16表 出土磁器観察表

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

編年 層別	出土 位置	器種	部位	土質	色調		器面状態		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
37	275	I	施		オリーブ灰	オリーブ灰			良	16.2	6.9 首短
	276	I	■		灰	灰			良	10	3 白磁
	277	I	■		灰	灰			良	10.3	3 白磁
	278	I	■		灰	灰			良	10	3 白磁

## 2 第II地点出土の遺物(第38図279~第40図296)

第II地点以下の出土遺物は、第I地点の分類に従ってまず器種ごとに分類し、その後それぞれについて第I地点の基準に従って細分を試みた。

## ① 壳形土器(第38図279~第38図281)

## I a類(第38図279)

胴部に1状の刻み目突帯を有する。脚は先端へ向けて直線的に開き、内面天井部に突起をもつ。口縁部はやや内湾する。

## II b類(第38図280)

断面が鋭い台形状の突帯に、間隔が広くまばらに刻み目が施されている。口縁部はやや内湾し、低い脚を有する。

## III b類(第38図281)

胴部から胴部にかけて残存しているもので、脚が先端へ向けて外反ぎみに直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。

## ② 盃形土器(第38図282)

## IX類(第39図283)

平底の短頸蓋である。

## ③ 鉢形土器(第39図283~第39図294)

## I b類(第39図283)

深い杯部と高めの脚部を有する。口縁部に段を有し、外面は丁寧な研磨を施す。脚は先端へ向けて外反ぎみに直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。若干摩耗して割じづらいが、器の内外面共に研磨されている。

## II b類(第39図284)

杯部に段を有するものである。口縁部はくの字状に外反する。

## II c類(第39図285~第39図294)

一般的にいう鉢である。口縁部は外反ぎみに直行するもの、直行するもの、内湾ぎみに直行するもの、やや内湾するものがある。

## ④ 高杯形土器(第40図295)

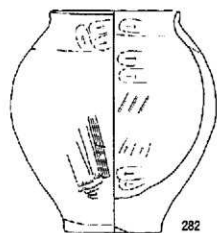
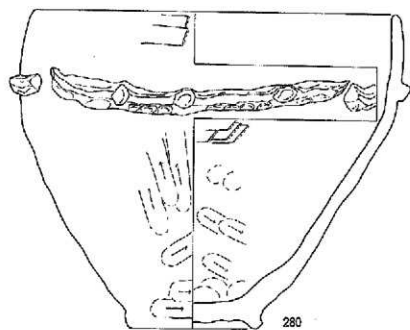
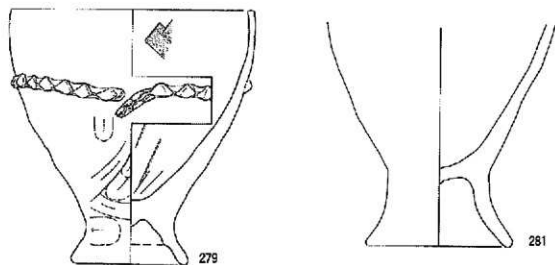
## III類(第40図295)

杯部に段も屈曲も有しないものである。口縁部はやや内湾する。口縁部に刻み目が1条走る。器の外面は研磨されている。

## ⑤ ミニチュア土器(第40図296)

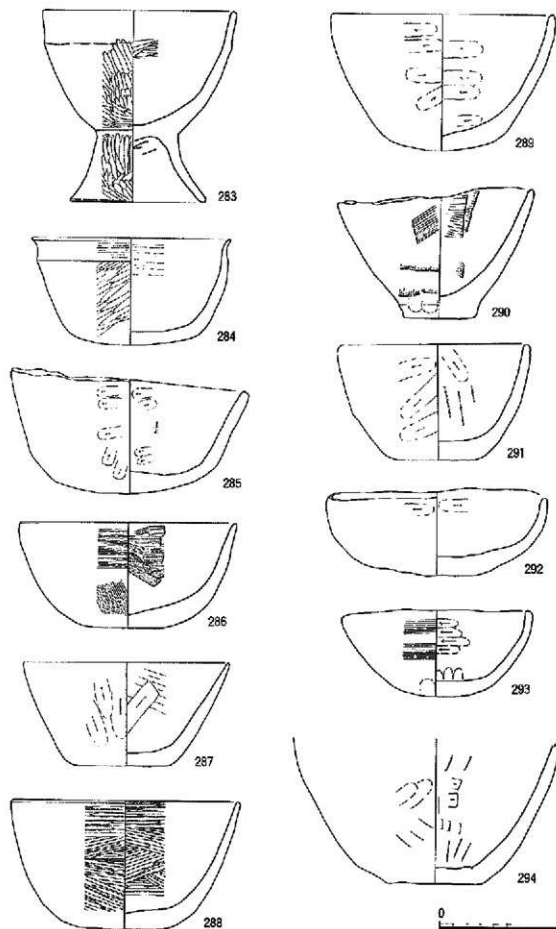
## III c類(第40図296)

比較的細身の手捏ねである。垂直に立つ胴部と直行して開く口縁部を有する。



0 10cm

第38图 出土文物实测图31 (钵形土器 I a 类, I b 类, 壶型土器)



0 10cm

第39图 出土文物实测图32 (钵形土器 I b 类, I c 类, II c 类)





296



296

0 10cm

第40図 出土遺物実測図33 (高杯形土器, ミニチュア土器)

第17表 出土土器観察表 (8)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=炭燼)

器種	器形	器種	器形	器種	色		器面調整		地味	口径	器高	備考
					内	外	内	外				
38	279	II	圓形	S.C.K	にぶい褐色	橙	色	底面ハナリ込み	良	18.2	16	突帯付き
	280	II	圓形	S.C.K				ユビナダ	良	27.8	23.6	突帯付き
	281	II	圓形	S.C.K	橙	色	内ハナリ	ハケ後ナダ	良			
	282	II	圓形	S.C.K				ハケ後ナダ	良	9.6	16.6	
39	283	II	圓形	S.C.K				ミガキ	良	15.4	14.3	
	284	II	圓形	S.C.K	橙	褐色	色	内ハナリ	良	14.5	8	一部残付者
	285	II	圓形	S.C.K	淡黄褐色	淡黄褐色		ハケ後ナダ	良	16.8	9.3	一部残付者
	286	II	圓形	S.C.K	赤褐色	明赤褐色		ハケ後ナダ	良	18.4	7.9	
	287	II	圓形	S.C.K	橙	色	橙	ハケ後ナダ	良	15.4	7.7	一部残付者
	288	II	圓形	S.C.K				ミガキ	良	17.2	9.6	残付者
	289	II	圓形	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ハケ後ナダ	良	15.6	10.2	
	290	II	圓形	S.C.K	黒	黒		ハケ後ナダ	良	11	9.8	一部残付者
	291	II	圓形	S.C.K	赤褐色	赤褐色		ハケ後ナダ	良	15	8.6	
	292	II	圓形	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ナ	良	16.6	5.8	一部残付者
40	293	II	圓形	S.C.K	にぶい褐色	橙	色	ユビナダ	良	14.4	8.5	
	294	II	圓形	S.C.K	橙	色	打ら込み	内ハナリ	良			一部残付者
	295	II	高杯形	S.C.K	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ハケ後ナダ	良	16.4		
	296	II	高杯形	S.C.K	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		ハケ後ナダ	良	6.2	6.2	

## 3 第三地点出土の遺物 (第41図297~第44図336)

## ① 甕形土器 (第41図297~299)

## I c類 (第41図297, 298)

胴部に1本の綫突帯を有するタイプである。297は爪形が意図的に施されている。脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部に突起をもつ。298の綫突帯は摩耗しており指によるつまみ痕が偶然としないが、幸うじて綫突帯と判断できる。口縁部は直行し、脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部に突起をもつ。

## II b類 (第41図 299)

脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。

## ② 壺形土器 (第41図300)

## I類 (第41図300)

二重口縁部を有する。口縁部と頸部にそれぞれ1条ずつ刻み目突帯を有する。刻み目は竹管文状の槽円形で難としたもので、器の外側と内面口縁部付近は研磨されている。

## ③ 鉢形土器 (第41図301~第43図307)

## I a類 (第41図301~第42図307)

広口で低い脚を有するタイプである。301~303は口縁部に段を有し、若干肥厚する口縁部は内湾ぎみに直行する。304~306の口縁部は直行する。307はやや内湾する口縁部を有する。

## I b類 (第42図308)

深い杯部と高めの脚部を有する。外面は研磨され、口縁部は内湾する。脚が端へ向けて直線的に開き、内面天井部に突起をもつ。

## I c類 (第42図309, 310)

深い杯部と低い脚部を有するのでI c類としたが、胴部に1本の綫突帯を有する。口縁部は直行する。脚の内面天井部の断面形は、放物線を描く。

## II a類 (第42図311)

胴部に1本の刻み目突帯を有する。口縁部は直行する。

## II c類 (第42図312~第42図324)

形状が一般的に鉢に分類されるものである。口縁部は直行するもの、内湾ぎみに直行するもの、やや内湾するものがある。

## II e類 (第43図325)

口縁部が内湾するものである。内外共に丁寧な研磨が施されている。

## II f類 (第43図326)

口縁部に2つの孔を有するものである。口縁部はやや内湾する。槽円形の底部を有する。

## ④ 高杯形土器 (第44図327~第44図330)

## V類 (第44図327~330)

口縁部がくの字状に屈曲するタイプである。327, 328の口縁部は外反し、329, 330の口縁部は「く」の字状に屈曲して内湾する。327, 329は器の外側が、330は器の内外面共に研磨されている。

⑥ 埴 (第44図331)

I a類 (第44図331)

平底で強い屈曲を持つ胴部を有する。外面に研磨を施す。

⑦ ミニチュア土器 (第44図332~334)

III b類 (第44図332、図333)

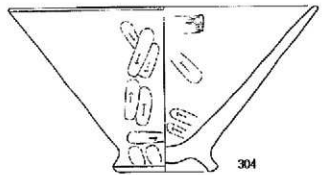
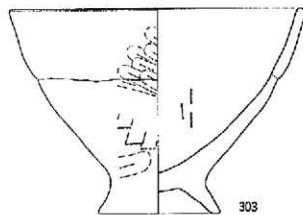
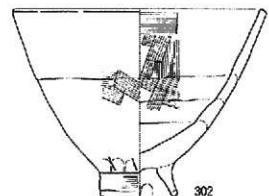
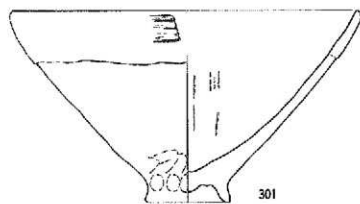
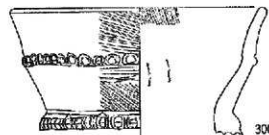
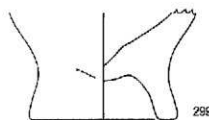
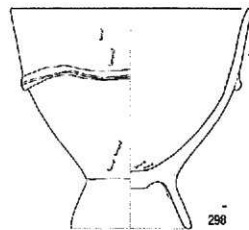
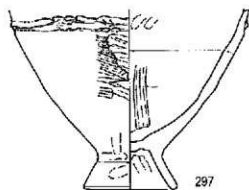
手握ねのうち桶状のものである。口縁部はやや内湾する。

III d類 (第44図334)

4つの孔を有する。口縁部はやや内湾する。

⑧ その他の土器 (第44図335、336)

335は第I地点出土の270と同様のもので、断面が緩い三角形状の突帯の一部がこぶ状に肥厚する。  
336は器種不明品である。器の内外面共に丹塗りで、研磨されている。



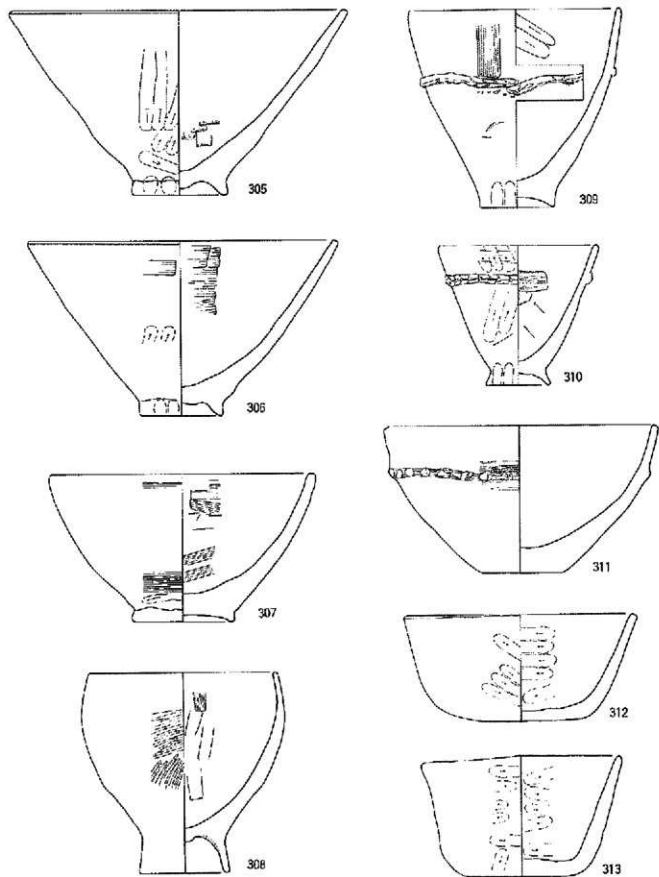
第18表 出土土器観察表 (9)

(S=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=空形)

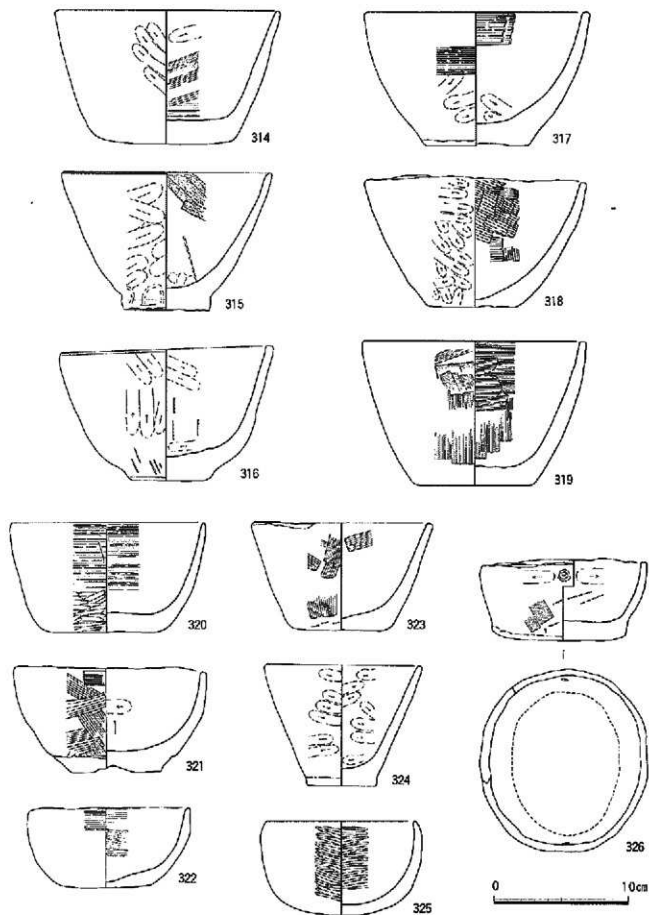
図号	器種	形状	部位	土色		器面調査		胎地	口径	高さ	備考
				内	外	内	外				
297	皿	浅		S.C.K	淡褐色	褐色	ハケ後ナデ	良			
298	皿	浅		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ヘラナデ	良	12	10.5	一部磨付着
299	皿	浅		S.C.K		明赤褐色		良			
300	皿	浅	口縁-乳帯	S.C.K			ハケ後ナデ	良	19.2		
301	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ打ち込み	良	20.2	13.3	
302	皿	針		S.C.K			ハケ後ナデ	良	19	14	
303	皿	針		S.C.K			ハケ打ち込み	良	22.2	14.2	
304	皿	針		S.C.K	明赤褐色	赤褐色	ハケ後ナデ	良	23.2	12.3	
305	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	良	25.4	13.8	
306	皿	針		S.C.K	褐色	褐色	ヘラ-磨付ナデ	良	23.2	13.1	外面磨耗
307	皿	針		S.C.K	褐色	褐色	ハケ後ナデ	良	20	11	
308	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	良	14.1	14.9	細砂-乳帯
309	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナデ	良	14.8	15.8	
310	皿	針		S.C.K	褐色	にぶい褐色	ヘラナデ	良	12	10	一部磨付着
311	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ヨコナデ	良	18.8	11	底部磨付着
312	皿	針		S.C.R	にぶい褐色	淡褐色	ナデ	良	17.4	8	
313	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	磨ハケナデ	良	14.8	9	
314	皿	針		S.C.K	褐色	褐色	ヨコナデ	良	18.6	10	磨付着
315	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	良	15.8	10.3	
316	皿	針		S.C.K	明赤褐色	褐色	ヨコナデ	良	16	10.1	
317	皿	針		S.C.R	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	良	17	10	
318	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	明赤褐色	ハケ後ナデ	良	16.6	9.8	一部磨付着
319	皿	針		S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	良	16.7	10.8	
320	皿	針		S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	良	14.2	8.3	底部磨付着
321	皿	針		S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ナデ	良	14.6	7.4	
322	皿	針		S.C.R	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	良	12.6	6.9	一部磨付着
323	皿	針		S.C.K	淡黄褐色	褐色	ハケ後ナデ	良	18.6	8	
324	皿	針		S.C.K	赤褐色	赤褐色	ヨコナデ	良	11.6	9	一部磨付着
325	皿	針		S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	良	11.2	7	
326	皿	針		S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	ヨコナデ	良	13.6	8	乳アリ

第41図 出土遺物実測図34 (壺形土器, 壺形土器, 鉢形土器 I a類)

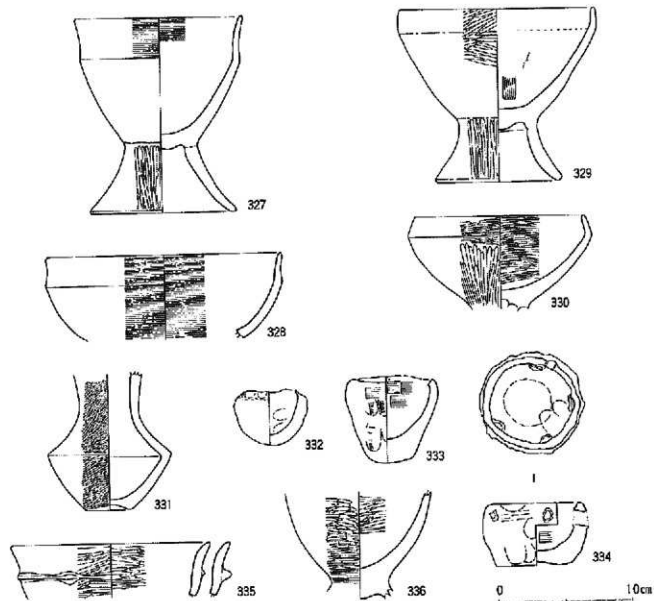
0 10cm



第42圖 出土遺物実測図35 (鉢形土器Ⅰa類~Ⅰc類, Ⅰa類, Ⅰc類)



第43圖 出土遺物実測図36 (鉢形土器Ⅱc類, Ⅱe類, Ⅱf類)



第44図 出土遺物実測図37 (高杯形土器, 埴, ミニチュア土器, その他の土器)

第19表 出土土器観察表 (1)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

発掘 層位	器種	器名	部位	胎土	色		器面調整		口径	器高	備考	
					内	外	内	外				
327	皿	高杯		S.C.K	にぶい緑色	赤褐色	ヨコナデ	T等なミヤギ	良	12.5	14	
328	皿	高杯	口縁部	S.C.K			ナ		良	17.8		
329	皿	高杯		S.C.K	にぶい赤褐色	明茶褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	良	12.6	18	一部流行着
330	皿	高杯	口縁-器底	S.C.K	赤褐色	赤褐色	色全体にミヤギ	しうすへの鳴	良	12.8		自然流行着
331	皿	埴	口縁-器底	S.C.K		赤褐色	色	ミヤギ	良			染成り
332	皿	埴	口縁	S.C.K		黄褐色	赤頭	須	良	3.9	4	底部流行着
333	皿	埴	口縁	S.C.K	緑	魚鱗	ナ	ナ	良	6.1	6.5	一部流行着
334	皿	埴	口縁	S.C.K			折頭	良	8	4.7		乳アリ
335	皿	埴	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	ミヤギ	ミヤギ		16		突出アリ
336	皿	埴	口縁	S.C.K	赤褐色	赤褐色	ミヤギ	ミヤギ				染成り

4 第IV地点出土の遺物 (第45図337~第45図346)

II 鉢形土器 (第45図337~340)

II c 類 (第45図337~340)

形状が一般的に鉢に分類されるものである。口縁部は直行するものとやや内湾するものがある。

⑤ ミニチュア土器 (第45図341~345)

II 類 (第45図341)

脚を有するもので無文のものである。口縁部は直行する。

III a 類 (第45図342~345)

手捏ねのうち、比較的に広い口縁部を有するタイプである。口縁部は直行するものとやや内湾するものがある。

III d 類 (第45図345)

孔を有する。口縁部は直行する。

⑤ 須恵器 (第45図346)

346は須恵器の杯身である。外反する口縁部と脚を有するもので、6世紀後半頃のものと考えられる。

第20表 出土土器観察表 (2)

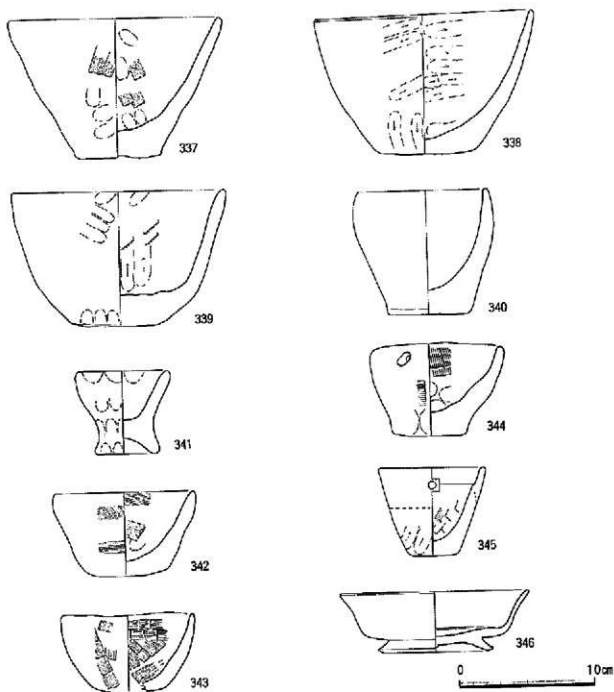
(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

発掘 層位	器種	器名	部位	胎土	色		器面調整		口径	器高	備考		
					内	外	内	外					
337	IV	皿	鉢	S.C.K	橙	色	色	ナ	ナ	良	16	10.4	
338	IV	皿	鉢	S.C.K	橙	色	色	ナ	ナ	良	16	10.1	黒乳アリ
339	IV	皿	鉢	S.C.K						良	8.1	10.6	一部流行着
340	IV	皿	鉢	S.C.K	淡粉	色	黄褐色	色		良	9.2	9.3	一部流行着
45	341	IV	皿	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	指	指	指	良	6.6	6.2	
342	IV	皿	S.C.K	橙	色	橙	色	ナ	ナ	良	10.8	6.2	
343	IV	皿	S.C.K							良	10	5.8	
344	IV	皿	S.C.K							良	10	6.9	
345	IV	皿	S.C.K	橙	色	ナ	ナ	ナ	ナ	良	8	6.6	底部流行着

第21表 出土須恵器観察表 (2)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

発掘 層位	器種	器名	部位	胎土	色		器面調整		口径	器高	備考	
					内	外	内	外				
45	346	IV	杯身		ナ	ナ	ナ	ナ	良	13.5	4.4	



第45図 出土遺物実測図38 (鉢形土器, ミニチュア土器, 須恵器)

5 その他の地点から出土の遺物 (第46図347~第51図418)

③ 変形土器 (第46図347~第46図354)

II a 類 (第46図347)

胴部に1条の刻み目突帯を有する。口縁部はやや内湾し、脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部がやや下方へ下がる。

II c 類 (第46図348~第46図350)

胴部に1条の絡縄突帯を有するタイプである。349は内湾ぎみに直行する口縁部を有する。脚は比較的低く、先端へ向けて外反しながら開き、内面天井部の断面形が放物線を描く。349は直行する口縁部を有する。脚が先端へ向けて直線的に開くが、内面天井部は広い平坦面をもつ。350の口縁部は外方に向けて直行する。

II d 類 (第46図351)

やや内湾する口縁部を有し、X字状の沈線が幾重にも施された突帯を胴部に有する。他の地点では見られないタイプである。

III b 類 (第46図352~353)

脚が先端へ向けて直線的に開き、内面天井部が突起をもつかやや下方に下がるものである。

III c 類 (第46図354)

脚はやや低く、先端へ向けて直線的に開き、内面天井部の断面形が放物線を描くもので、鉢形土器に分類される可能性もある。

② 変形土器 (第47図355~358)

I 類 (第47図355)

胴部が直行的に外へ伸び、くの字状に強く屈曲する口縁部を有する。形状の類似からI類とした。頸部に刻み目がまばらに施された2条の断面が緩い三角形の突帯を有する。

II 類 (第47図356)

胴部より直線的に伸び、上方はラップ状に弧を描きながら外反する口縁部を有する。頸部に1条の刻み目突帯を有する。

X I 類 (第47図357)

直線的に立ち上がり、やや内湾する口縁部を有する。頸部に1条の刻み目突帯を有する。他の地点では見られないタイプである。

X II 類 (第47図358)

頸部にX状の沈線が幾重にも施された1条の突帯を有する。外面は研磨されている。口縁部が残っていないが、形状としては変形土器II類としたものと同様であると考えられる。

③ 鉢形土器 (第48図359~第49図374)

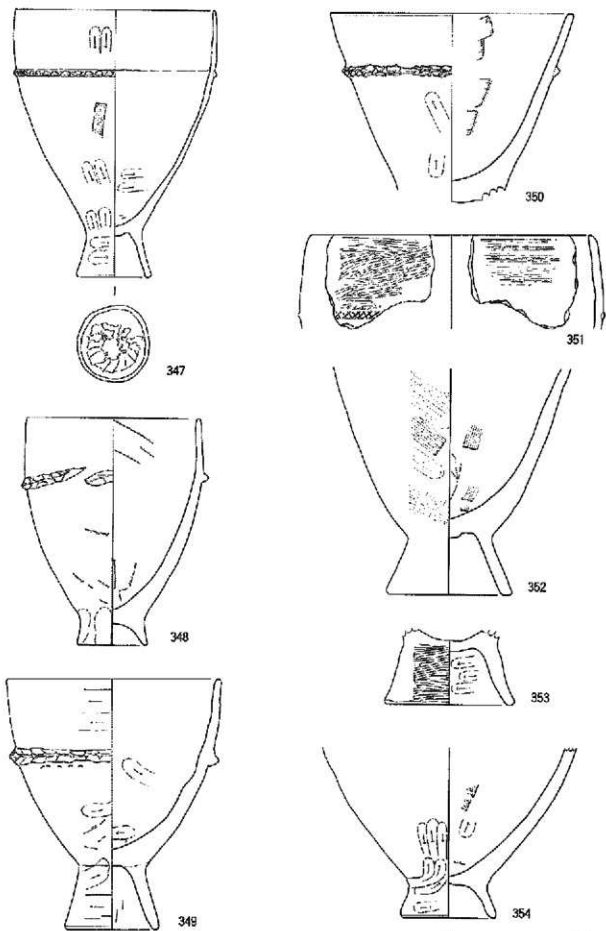
I a 類 (第48図359~361)

広口で低い脚を有するタイプである。359は外反する口縁部を、360、361は直行する口縁部をそれぞれ有する。

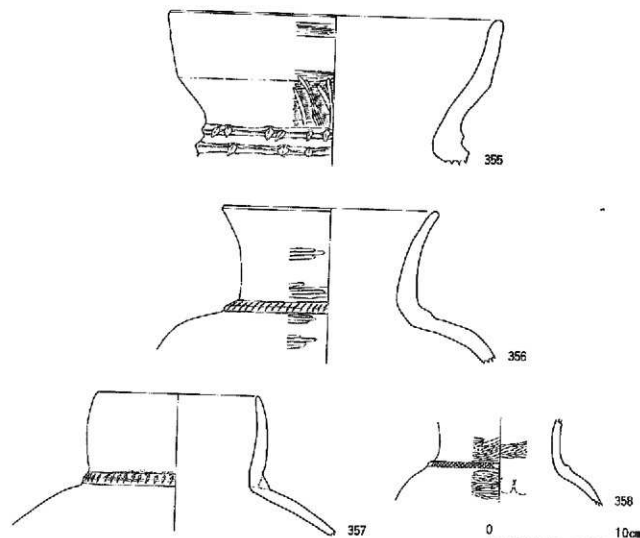
II a 類 (第48図362)

胴部に1条の刻み目突帯を有するものである。口縁部は内湾ぎみに直行する。





第46図 出土遺物実測図39 (甕形土器)



第47図 出土遺物実測図40 (盃形土器)

Ⅱc類 (第48図363~第49図373)

一般的に鉢に分類されるものである。口縁部は直行するものと内湾ぎみに直行するものがある。373は大型で楕円形の底部を有する。

Ⅱf類 (第49図374)

口縁部に2つの孔を有する。口縁部は直行する。底部は楕円形である。

④ 高杯形土器 (第50図375~第51図402)

Ⅱ類 (第50図375~376)

杯部に屈曲を持つタイプである。口縁部は375が外反、376は外方に直行する。

Ⅳ類 (第50図377~第51図394)

杯部に1条の断面が鋭い三角形状あるいは台形状の突帯を有する。377~379の突帯には刻み目が施されている。380は2条の突帯を有する。口縁部はやや外反するもの、直行するもの、やや内湾するものがある。外面或いは内外面共に研磨されているものが多い。

V類 (第50図395, 366)

口縁部がくの字状に屈曲するタイプである。

VI類 (第51図397-399)

口縁部に段を有するタイプである。いずれも段部に刻み目が1条巡る。外面あるいは内外面共に丁寧な研磨が施されている。

Ⅷ類 (第51図400-402)

脚部のみ残存しているものを一括して取り扱った。400は長方形の孔を有する。401は中空で先端に向かって外反する脚のものである。402は軸部が充実し、下方が先端に向かって直線的に伸びる脚のものである。脚部の内面天井部は放射線を描く。

⑦ 埴 (第51図403)

I a類 (第51図403)

平底で強い屈曲を持つ胴部とやや内湾する口縁部を有するタイプの口縁部である。口縁は直行する。

⑧ ミニチュア土器 (第51図404-415)

I b類 (第51図404)

脚と、1条の断面が緩い三角形形状の突起を有する。口縁部は直行する。

Ⅱ類 (第51図405-409)

脚を有するもので無文のものである。口縁部は直行するものとやや内湾するものがある。

Ⅲ b類 (第51図410-414)

手摺ねのうち楕状のものである。口縁部は直行するもの、やや内湾するものがある。

Ⅲ d類 (第51図415)

手摺ねのうち孔を有するものである。口縁部は直行する。

⑨ その他の土器 (第51図 416、417)

416はメンコ状の円形土板である。417は口縁部で、外反する二重口縁である。器の外面は丹塗りで研磨されている。須恵器の口縁部に類似しており、模倣品であると思われる。

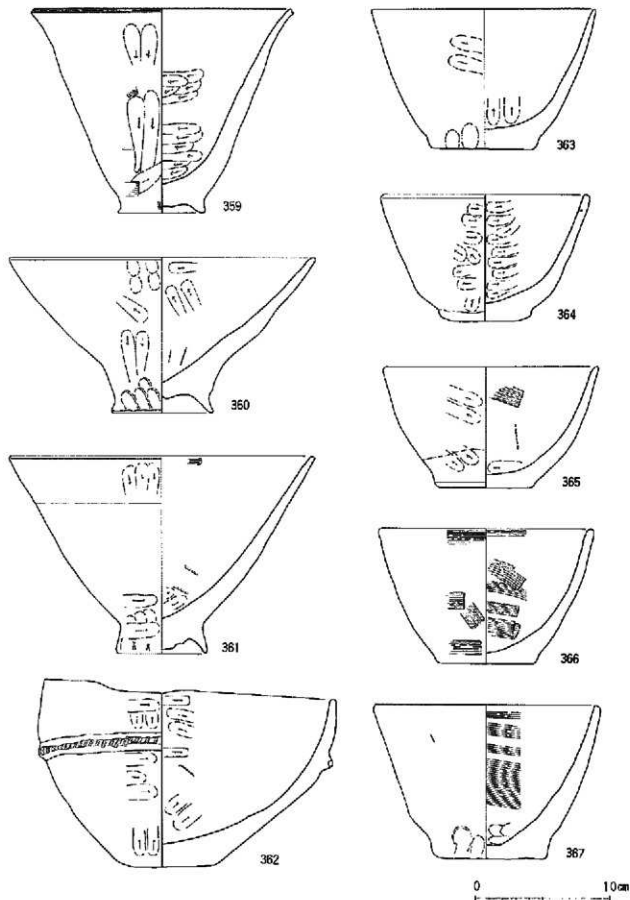
⑩ 土師器 (第51図418)

418は土師器皿の底部である。

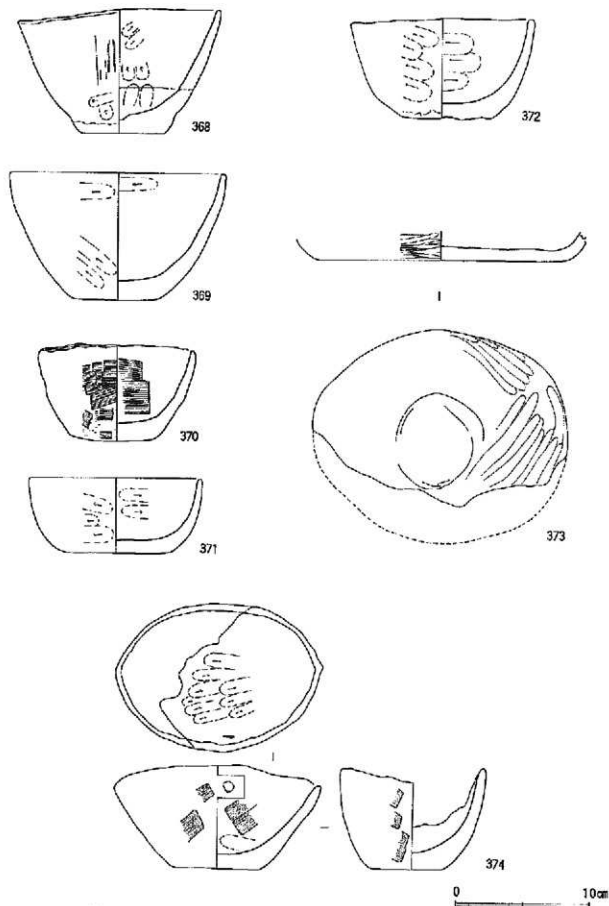
⑪ 須恵器 (第52図419-第53図445)

419-423は杯蓋である。424-432は杯身である。432は陶器である。器種は壺である。433-436は高杯である。433、434は高杯の杯部で、口縁部は外反する。433の口唇部は外方に突出し、上唇は面を有する。下方に1条の断面が三角形形状の突起を有し、その間に波状文が施される。435、436は高杯の脚部である。435は長方形のスカンを有する。437・440は壺である。440は長頸壺あるいは短頸壺の胴部と考えられる。

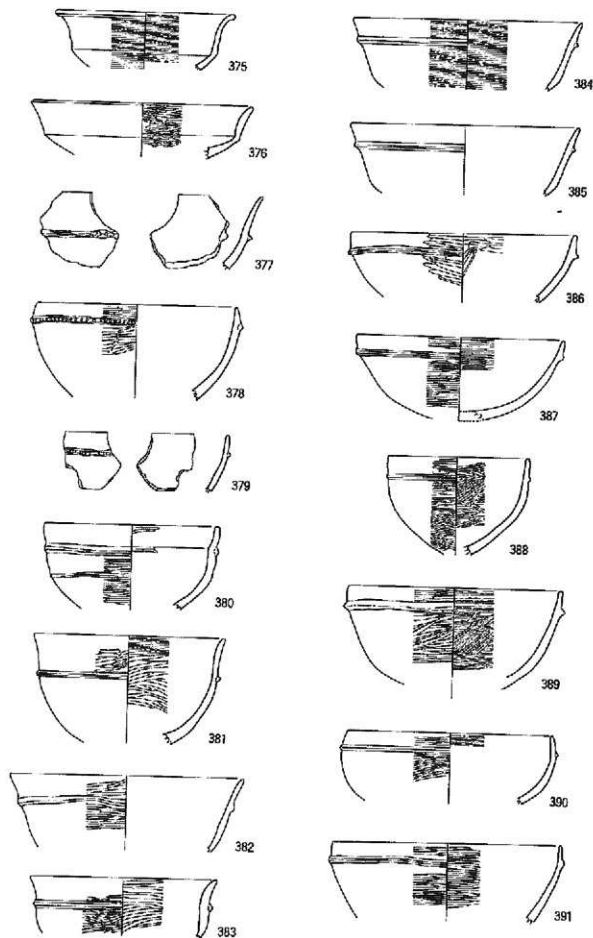
442は横瓶で、口縁部から胴部にかけて残存している。438、439、441、443-445は甕である。



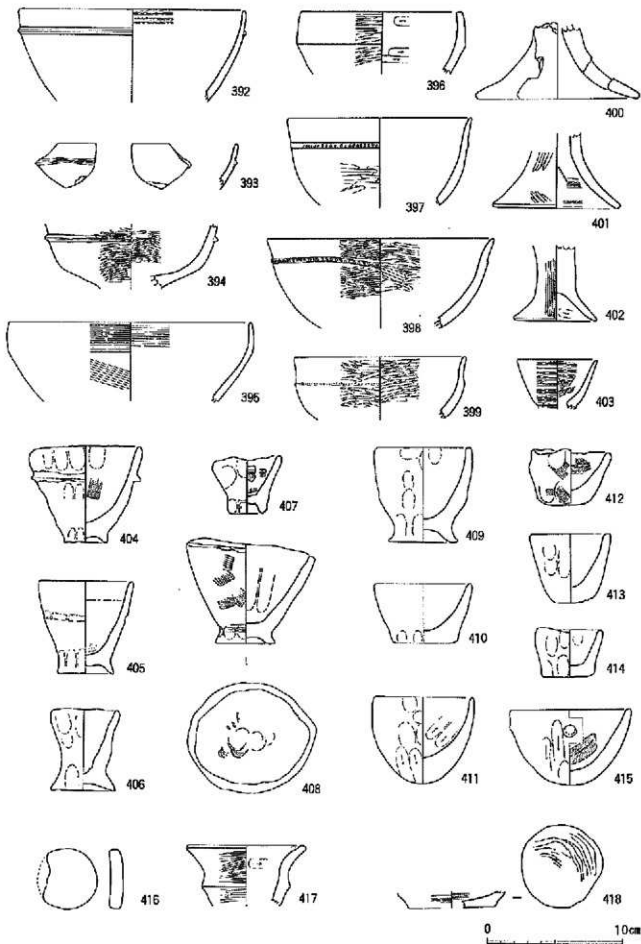
第48図 出土遺物実測図41 (鉢形土器 I a類, I a類, I c類)



第49图 出土遺物実測図42 (鉢形土器Ⅰ□類, Ⅱf類)



第50图 出土遺物実測図43 (高杯形土器)



第51図 出土土物実測図44 (ミニチュア土器, その他の土器, 土師器)

第22表 出土土器観察表 (2)

(S=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

相模 番号	器種	形状	器性	部位	胎土	色		器面		装束	底径	口径	器高	備考
						内	外	内	外					
347	甕				S.C.K			ナ	ナ	ナ	底	15	20	実測アリ
348	甕				S.C.K			明赤褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	13	17	実測アリ
349	甕				S.C.K	橙	色	橙	ナ	ナ	底	16	18.8	実測アリ, 裏面付
350	甕	口縁一部			S.C.K	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ	底	18.2		実測アリ
351	甕	口縁部			S.C.K	橙	色	にぶい褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	21		実測アリ
352	甕				S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底			実測アリ
353	甕				S.C.K			明赤褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底			
354	甕				S.C.R			ハケ後ナ	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底			
355	甕	口縁部			S.C.R						底	25		実測アリ
356	甕	口縁一部			S.C.K						底	16		実測アリ
357	甕	口縁一部			S.C.K						底	12		実測アリ
358	甕	口縁部			S.C.K			黄褐色	ナ	ナ	底			実測アリ
359	甕				S.C.K			にぶい褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	19.6	15.2	内側縁付着
360	甕				S.C.K				ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	23	11.5	
361	甕				S.C.K			にぶい褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	23	14.7	一部裏面付着
362	甕				S.C.K				ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	22.3	14	
363	甕				S.C.K	黄褐色	橙	色	黄褐色	黄褐色	底	15.6	9.5	黒斑アリ
364	甕				S.C.N	にぶい褐色	橙	色	黄褐色	黄褐色	底	15.6	9.5	黒斑アリ
365	甕				S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ナ	ナ	底	16	9	黒斑アリ
366	甕				S.C.K	橙	色	橙	色	ナ	底	16	10	
367	甕				S.C.K	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ	底	17	11.5	黒斑アリ
368	甕				S.C.K	黄褐色	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ	底	15.2	9.3	
369	甕				S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ナ	ナ	底	16.1	9.5	一部裏面付着
370	甕				S.C.K	橙	色	黄褐色	ハケ後ナ	ハケ後ナ	底	11.8	7.2	一部裏面付着
371	甕				S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ナ	ナ	底	13.8	8.5	
372	甕				S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ナ	ナ	底	13	5.5	底面縁付着
373	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	15.6	7.7	
374	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	15.6	7.7	
375	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	13.4		
376	甕				S.C.K	にぶい褐色	赤	色	ナ	ナ	底	16.6		
377	甕				S.C.K				ナ	ナ	底			実測アリ
378	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	15.8		裏面付, 実測アリ
379	甕				S.C.K	赤褐色	赤褐色	赤褐色	ナ	ナ	底			裏面付, 実測アリ
380	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	7.6		実測アリ
381	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	14.4		実測アリ
382	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	17.6		実測アリ
383	甕				S.C.K	にぶい褐色	赤褐色	赤褐色	ナ	ナ	底	14		実測アリ
384	甕				S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色		ナ	ナ	底	17		実測アリ
385	甕				S.C.K	赤褐色	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ	底	17.3		実測アリ
386	甕				S.C.K	赤褐色	黄褐色	黄褐色	ナ	ナ	底	15.9		実測アリ, 裏面付
387	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	10.6		実測アリ
388	甕				S.C.K	にぶい褐色	明赤褐色	明赤褐色	ナ	ナ	底	18		実測アリ
389	甕				S.C.K	黄褐色	明赤褐色	明赤褐色	ナ	ナ	底	15.3		実測アリ
390	甕				S.C.K	黄褐色	明赤褐色	明赤褐色	ナ	ナ	底	17.3		実測アリ
391	甕				S.C.K				ナ	ナ	底	17		実測アリ
392	甕				S.C.K	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	ナ	ナ	底			実測アリ

第23表 出土土器観察表 (3)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

標本番号	器名	器種	部位	胎土	色		器面調整		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
363	高杯	胴部	胴部	S.C.K					18.2		尖付アリ
364	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	褐色	褐色			18.2		移付否
375	高杯	胴部	胴部	S.C.K					18.2		
376	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K					17		底面アリ, 尖付アリ
377	高杯	胴部	胴部	S.C.K	褐色	褐色			13.8		尖付アリ
383	高杯	胴部	胴部	S.C.K	灰褐色	にぶい褐色			19.6		
389	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K							孔アリ
400	高杯	胴部	胴部	S.C.K	黄褐色	黒褐色					
401	高杯	胴部	胴部	S.C.K							
402	高杯	胴部	胴部	S.C.K							
403	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色			6		
404	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			7.1		771, 772 移付否
405	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			6.3		771, 772 移付否
406	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K					2.2		
407	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			5.2		一部移付否
408	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	黄褐色	茶褐色			7.4		
409	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	褐色	褐色			7.5		
410	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			4.4		
411	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			5.1		
412	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	褐色	褐色			6.4		移付否
413	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K					3.3		
414	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	にぶい褐色	にぶい褐色			3.5		一部移付否
415	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K	明赤褐色	明赤褐色			5.6		
416	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K							
417	高杯	口縁部	口縁部	S.C.K							朱付

第24表 出土土器観察表 (2)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

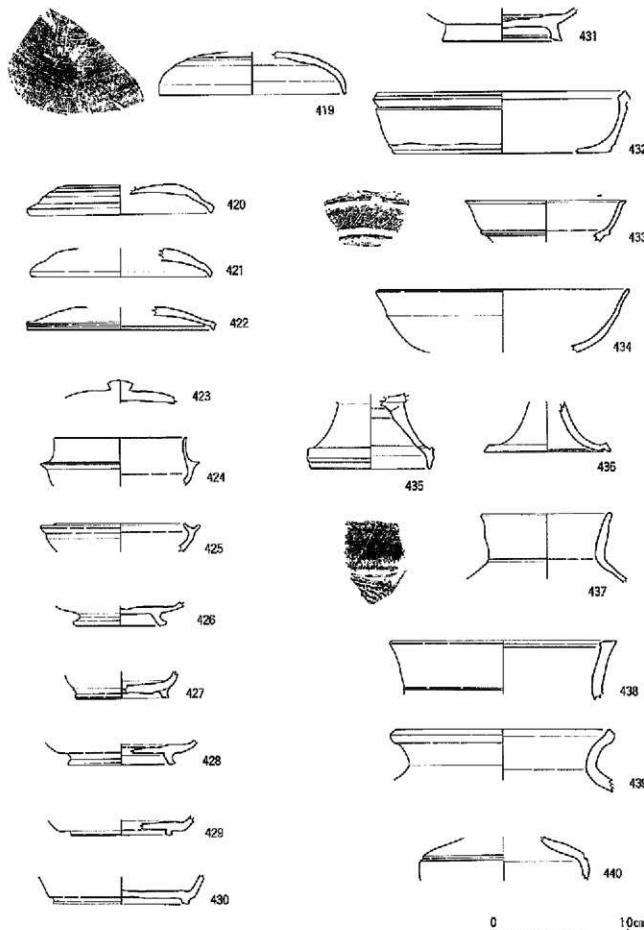
標本番号	器名	器種	部位	胎土	色		器面調整		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
51	418	皿	底面		褐色	褐色					底面は系切リ

第25表 出土土器観察表 (3)

(S=石炭, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母)

標本番号	器名	器種	部位	胎土	色		器面調整		口径	器高	備考
					内	外	内	外			
419	杯	胴部	胴部	灰	灰	白	白		14.8		
420	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		13.6		
421	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		13.8		
422	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		14		
423	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
424	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
425	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		9.7		
426	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		9.7		
427	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
428	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
429	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
430	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
431	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		18.6	4.6	
432	杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		12		
433	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		18.6		
434	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
435	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
436	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
437	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		0.7		
438	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		16.8		
439	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		16		
440	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
441	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		22		
442	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白		11		
443	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
444	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				
445	高杯	口縁部	口縁部	灰	灰	白	白				

取424は陶器である。



第52図 出土遺物実測図45 (須恵器, 陶器)



## 第IV章 まとめにかえて

本遺跡から出土した遺構は、土坑が数基と4基の土器溜まりであり、住居址等は検出できなかった。土坑については、その配列は特に規則性があるものではなく、そこから何らかの意味を見いだすのは困難である。土器溜まりについては、出土土器の大半が成川式土器であるということの他には、確たることは不明である。このように、遺構に関しては今回特記すべきことはないので、本章では出土品の大半を占める成川式土器に焦点を絞って進めていくことにする。

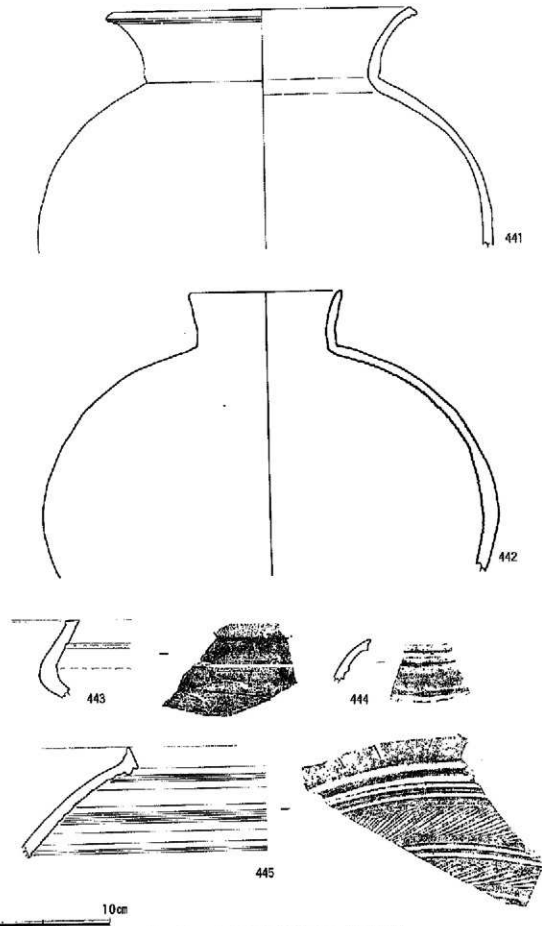
古墳時代は、「前方後円墳に代表される古墳の濠管に象徴されるように、墓などにみられる弥生時代の地域色が斉一的なものに変化する時期」であり、使用される土器も「地域色の強い弥生式土器から斉一的な土師器に転換」する。このような全国的な流れの中にあつて、南九州では、完全には土師器化しない非常に在地色の強い土器を使用し続ける。すなわち、「成川式土器」とよばれる土器である。成川式土器については、研究者による表現の違いこそあれ、「古墳時代にいたつても弥生式土器の伝統を色濃く残し、土師器への転換を拒み続けた排他的な土器様式」という認識はおおむね共通の認識である。また、「卑土の用いた土器」という認識もかなり強い。

しかし、成川式土器の、時間的様式界の問題（どの時期のものから成川式土器と呼ぶのか、どの時期のものまで成川式土器と呼ぶのか）や、各研究者による編年観や分類の仕方等に様々な問題があり、成川式土器が内包する問題の解明は容易なものではない。

成川式土器については、各器種の形式分類から6つの分類に様式設定した中村直子（中村、1987）の研究が画期的なものと認識されており、本報告書でも土器の分類に関して参考とするところが大きく、それによる本遺跡出土の成川式土器は、正堂原式・笹貫式に分類されるものが多い。本遺跡からは須恵器も若干出土しており、本来なら成川式土器の下限を考える上で貴重な資料となるのであろうが、本遺跡の出土品は、確たる遺物包含層からの出土ではなく4基の土器溜まりからの出土が大半を占めること、土器溜まりの直上からは13世紀頃と考えられる青磁碗と白磁皿が出土していたり、遺物一括品の中に比較的新しい時代のもと思われる須恵器の混入が見られたりしていること等から、順位によって正確な時間差を捉えることは極めて困難であり、そういう意味での資料性は低いと言わざるを得ない。しかしながら、本遺跡から出土した土器は実に多種多様なものであり、成川式土器の器形分析という観点からは非常に貴重な資料であるといえよう。

近年中村は、土器を単なる食器としてだけでなく、高杯等に見られる祭祀的側面や身分表示という象徴的な側面を持つメディアの一種として捉えるという内山敏行の研究にならい（内山、1997）、南九州の土器について研究している（中村、1999）が、この内容が同期的なものであるため、一部引用させていただきながら、後々道A遺跡出土の成川式土器についての解釈を進めていくことにする。

内山は食器の使用法と飲食物、使用人数により分類しているが、このうち手で持ち上げて使用する「手持食器」、置いたままそこから手、あるいは箸で食物をとる「置食器」の2種類がある。飲食物による分類には、固形物を入れる「食用器」、液体または流動性食品用の「飲用器」、またはどちらも兼ねる「飲食兼用器」の3種がある。使用する人数による分類には、何個人が使用する「銘々



第53図 出土遺物実測図46（須恵器）

器」と共同で使用する「共用器」がある。更に、「手持食器」は、その持ち方から、底持ち法、上下持ち法、把手持ち法、握面持ち法、脚持ち法に分類している。

中村は土器のうち食器として考えられる高杯、鉢、小型丸底壺、甗について、内山の分類法に従い分類を試みている。高杯を食用の置食器とし、口径が25-30cm前後のもの(高杯a)と、20cm前後のもの(高杯b)と分類している。高杯aはサイズが大きいため共用器とし、高杯bはサイズが小さく、出土量も増加する傾向にあることから銘々器としている。鉢は、広口で脚台を持つもの(鉢a)、碗状で平底のもの(鉢b)、楕状で丸底のもの(鉢c)、コップ状のもの(鉢d)に分類している。鉢aを置食器とし、他は口径の小ささ(10-15cm前後)から手持食器としている。鉢bが広口で深いものが多いことから食用器、鉢cは広口で浅めの器形から飲食兼用器、鉢dは飲用器としている。甗を飲用器とし大型のものは共用で置いてつきつけるか、まわしのみをしていたもの、小型のものを銘々器としている。

更に中村はこの使用法に基づき南九州の古墳時代の遺跡から出土した土器を整理し、古墳時代後半期には薩摩半島と大隅半島で若干の差異が見られることを指摘している。すなわち、薩摩半島では高杯bと、甗a・b、鉢a・b・cがセットに出土しており、銘々器である置食器と、小型の手持食器、大型飲用器と小型飲用器のセットであるとしている。大隅半島では、高杯a・b、甗b、鉢b・cがセットになっており、共用の置食器、銘々器の置食器と手持食器で構成されるとしている。このことから、薩摩では大型の飲用器が発達し、大隅では共用器としての大型の高杯が残るといふ差異と銘々器の置食器である高杯bの増加という共通点をあげている。

古墳時代中期に手持食器・手持飲食兼用器である須恵器の杯身が登場し、「置いた高杯から手で取り、飲用器は手でもつ」から、「飲食ともに手持食器を使う」という食事様式の変遷をもたらした(内山, 1996)。これは高杯が減り杯という碗状の食器が増えることに変れている。中村はこれに対し、南九州では、高杯そのものは土師器の形態をまねるといふ外部情報の受け入れが見られるが、高杯bが増加することから、置食器を使う食事様式が縮小としている(中村 1999)。

このような分類を踏まえ、本遺跡の特徴について考察してみる。本遺跡からは、高杯a・b、鉢a・b・c・d、甗a・bが出土しており、中村の言う大隅出土の食器構成と比べて、鉢a・d、甗aが加えられることに気づく。このことから、大型の飲用器が発達するのは必ずしも薩摩に限るとは言えないことが分かる。本遺跡からは、他器種に比べて鉢の出土量が圧倒的に多く、中でも鉢b・cが多いが、高杯は鉢と比べると少ない。これは鉢の完形率の高さによるものも大きいですが、単純にそうは言い切れないことも確かである。鉢b・cの出土量が多いということは手持の銘々器が多いということであり、「置いた高杯から手で取り、飲用器は手でもつ」食事様式とは若干異なり、むしろ「飲食ともに手持食器を使う」という食事方式に近いと言える。もっとも、本遺跡の出土遺物の多くは中村の分類では辻堂原式・笹貫式に分類される成川式土器の中では比較的新しい時期のものも多く、南九州の食事様式が「置いた高杯から手で取り、飲用器は手でもつ」から「飲食ともに手持食器を使う」に変換する過渡期であった可能性もあり、そういう意味からはむしろ本遺跡から高杯が出土していることに注目し、置食器としての高杯が残存していることの意味を考えるほうが大勢であろう。また、鉢bの出土量の多さは、古墳時代後半期に銘々器の使用が定着したとする中村の考え方を裏付ける結果になる。

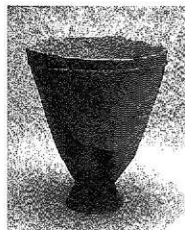
本遺跡は、前述したように土器の器形分析という観点から見れば、非常に貴重な資料であるといえるが、整理期間の不足や筆者の知識の不足から資料として十分な内容のものには至らなかったのが遺憾である。しかし、何とかこのように報告書としての体裁を保つに至ったのは、ひとえに様々な先生方のご教示・ご協力によるものである。本稿をまとめるにあたって、上村俊雄、本田道輝、渡辺芳郎、中村直子、大西智和、粟川朋枝の諸氏、諸先生方からさまざまなご教示・ご協力を賜ったことを感謝して、結びの言葉とさせていただきます。

#### [引用・参考文献]

- 中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』6:57-56  
中村直子 1999 「古墳地帯と黒古墳地帯のコミュニケーション  
—南九州の土器をメディアとして—」鹿児島大学教育研究学内特別経費  
全学プロジェクト『新しい関係をもとめて—コミュニケーションの龍相—』  
本田道輝 1997 「南部九州における脚台付甗の底部成形について」『人類史研究』第9号  
内山敏行 1996 「手持食器考—日本の食器使用法の成立—」『Hominids』1:21-47



1



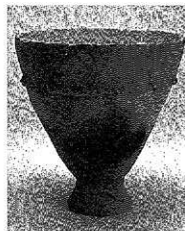
2



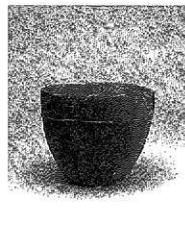
3



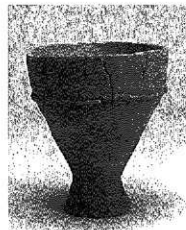
4



5



6



7

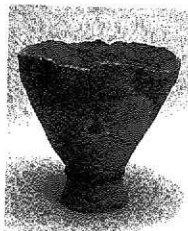


8



9

後ヶ迫遺跡出土遺物(1) 甕 (銅 | 地点)



10



11



13



14



15



16



17

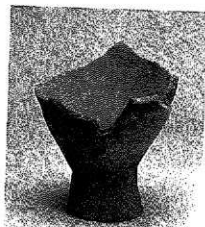


18

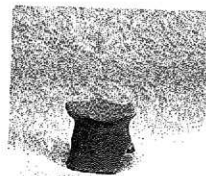


19

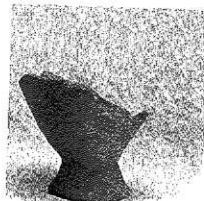
後ヶ迫遺跡出土遺物(2) 甕 (第1地点)



20



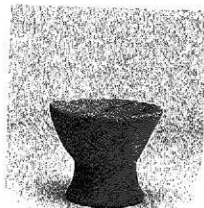
21



22



23

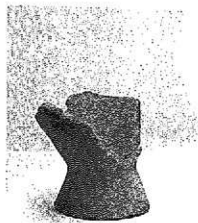


24



25

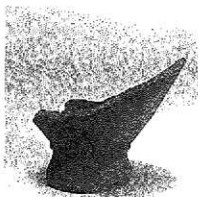
後ヶ迫遺跡出土遺物(3) 甕 (第1地点)



26



27



28



29



31



32



33

後ヶ迫遺跡出土遺物(4) 甕 (第1地点)



36



37



38



40



42



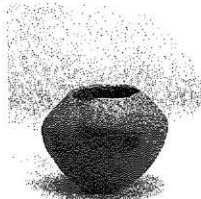
43

後ヶ迫遺跡出土遺物(5) 甕 (第1地点)





44



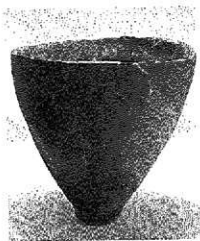
45



46



47

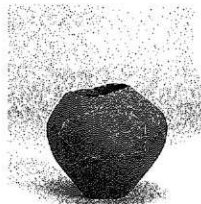


48



49

後ヶ迫遺跡出土遺物(6) 壺〈第1地点〉



50



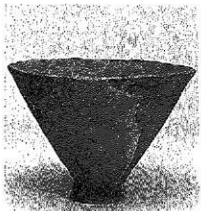
51



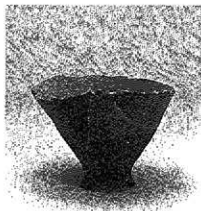
53



54



55



56

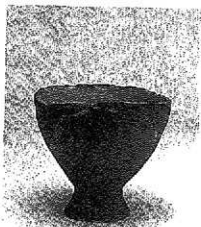
後ヶ迫遺跡出土遺物(7) 壺・鉢〈第1地点〉



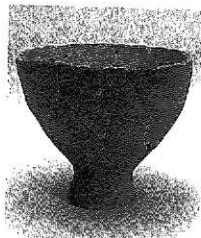
57



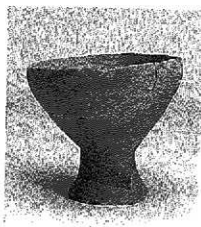
58



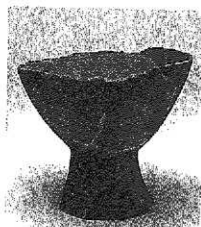
59



60

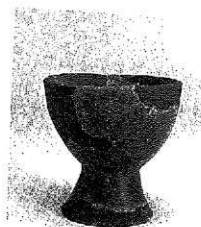


61



62

後ヶ迫遺跡出土遺物(8) 鉢 (第1地点)



63



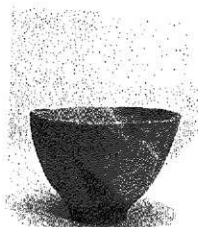
64



66



66



67



68

後ヶ迫遺跡出土遺物(9) 鉢 (第1地点)



69



70



71



72



73



74



75



76

後ヶ迫遺跡出土遺物(10) 鉢 (第1地点)



77



78



79



80



81

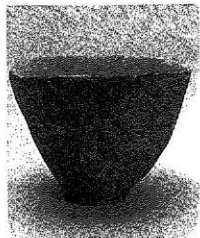


82

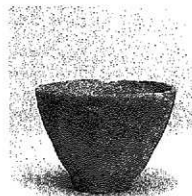
後ヶ迫遺跡出土遺物(11) 鉢 (第1地点)



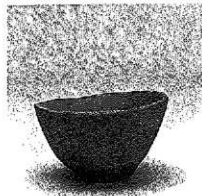
83



84



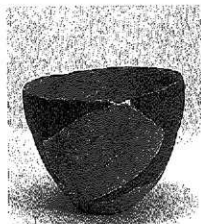
85



86

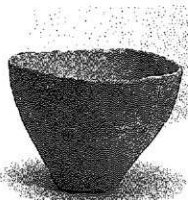


87



88

後ヶ迫遺跡出土遺物(12) 鉢 〈第1地点〉



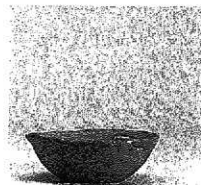
89



90



91



92



93



95

後ヶ迫遺跡出土遺物(13) 鉢 〈第1地点〉



96



97



98



99



100



101

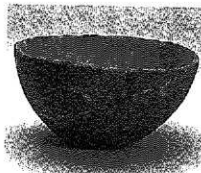
後ヶ迫遺跡出土遺物(14) 鉢 (第1地点)



102



103



104



105



106



107



108



109

後ヶ迫遺跡出土遺物(15) 鉢 (第1地点)





110



111



112



115



116



117



118



119



120



121



122



123

後ヶ迫遺跡出土遺物(16) 鉢 〈第1地点〉



124



125



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136

後ヶ迫遺跡出土遺物(17) 鉢 〈第1地点〉



137



138



139



140



142



143



144



145

後ヶ迫遺跡出土遺物(18) 鉢 (第1地点)



146



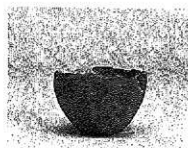
148



151



152



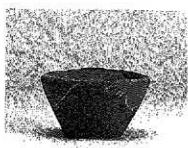
153



154



155



156



157



158



159



163

後ヶ迫遺跡出土遺物(19) 鉢 (第1地点)



164



165



167



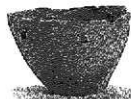
168



169



170



171

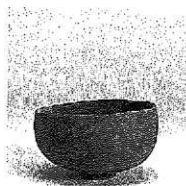


172



173

後ヶ迫遺跡出土遺物(20) 鉢・高杯 (第1地点)



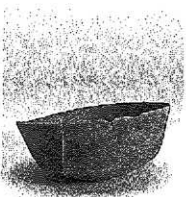
174



175



176



177



178



179



180

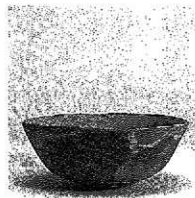


181

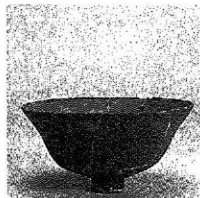


183

後ヶ迫遺跡出土遺物(21) 高杯 (第1地点)



184



185



186



186



189



191

後ヶ迫遺跡出土遺物(22) 高杯 (第1地点)



192



193



194



195



196



202

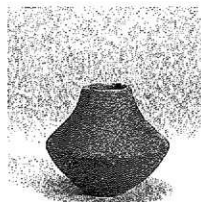


204

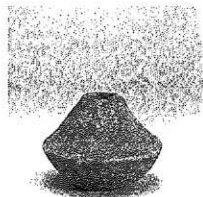


205

後ヶ迫遺跡出土遺物(23) 高杯 (第1地点)



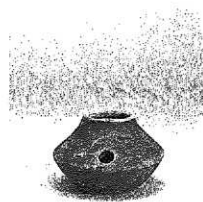
206



207



208



209



210

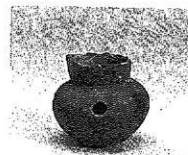


211

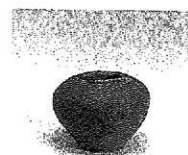
後ヶ迫遺跡出土遺物(24) 高坏・环・埴 (第1地点)



212



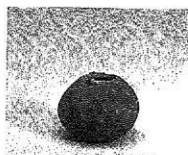
213



214



215



216



219



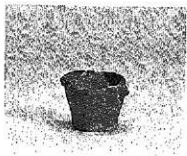
220



221



222



223



224



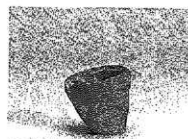
225

後ヶ迫遺跡出土遺物(25) 坏・埴・ミニチュア (第1地点)





226



227



228



229



230



232



233



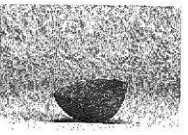
234



235



236

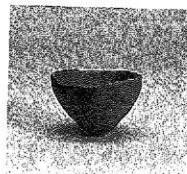


237

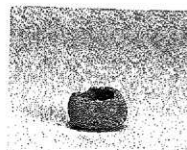


238

後ヶ迫遺跡出土遺物(26) ミニチュア (第1地点)



239



240



241



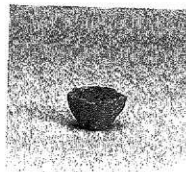
242



243



244



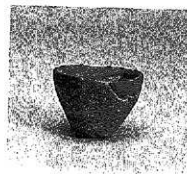
245



246



247



248

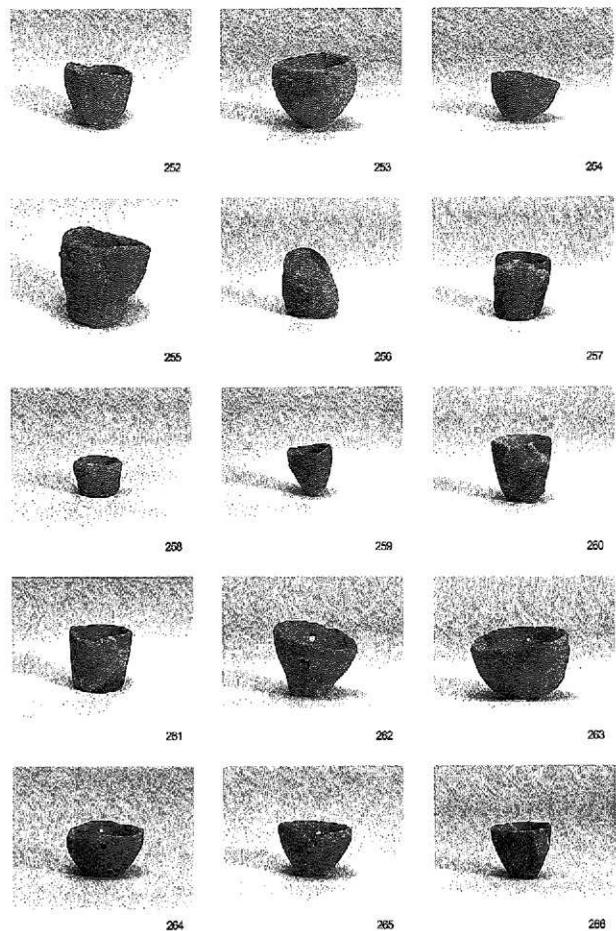


249

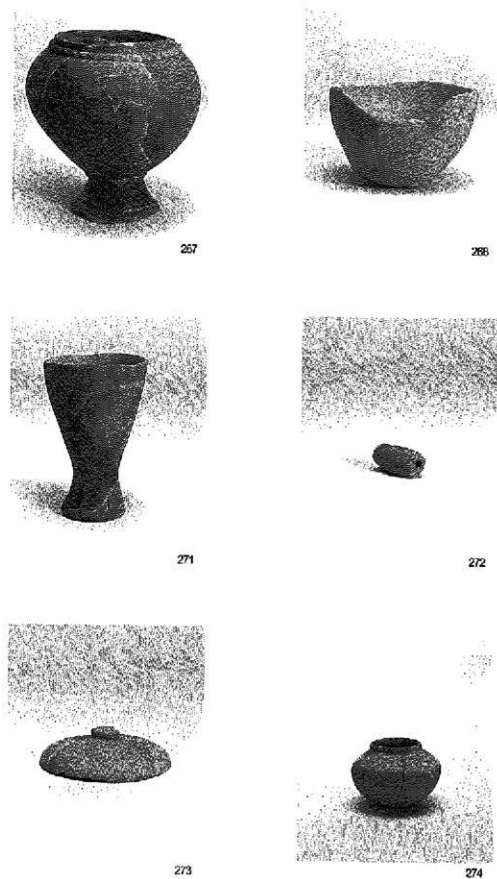


251

後ヶ迫遺跡出土遺物(27) ミニチュア (第1地点)



後ヶ迫遺跡出土遺物(28) ミニチュア 〈第1地点〉



後ヶ迫遺跡出土遺物(29) 特殊な遺物・土鍾・土師器・須恵器 〈第1地点〉



275



276

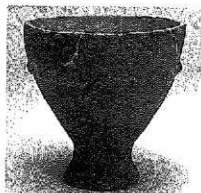


277



278

後ヶ迫遺跡出土遺物(30) 青磁碗・白磁皿 (第Ⅰ地点)



279



280



281



282



283



284



285



286

後ヶ迫遺跡出土遺物(31) 甕・壺・高坏・鉢 (第Ⅱ地点)



287



288



289



290



291



292



293



294

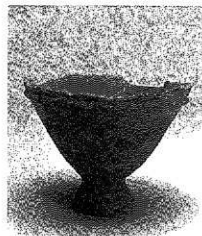


295



296

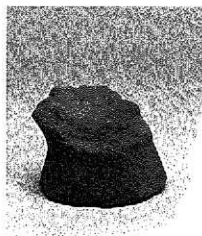
後ヶ迫遺跡出土遺物(32) 鉢・高坏・ミニチュア (第II地点)



287



296



299



300

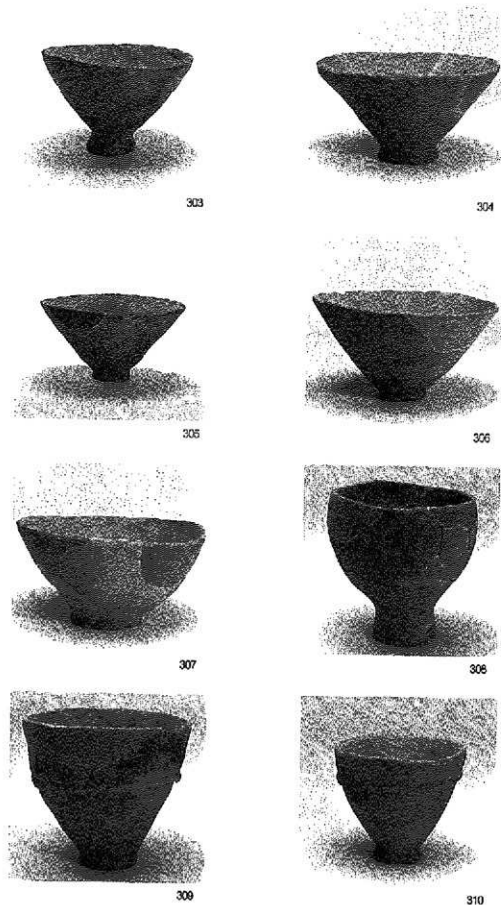


301

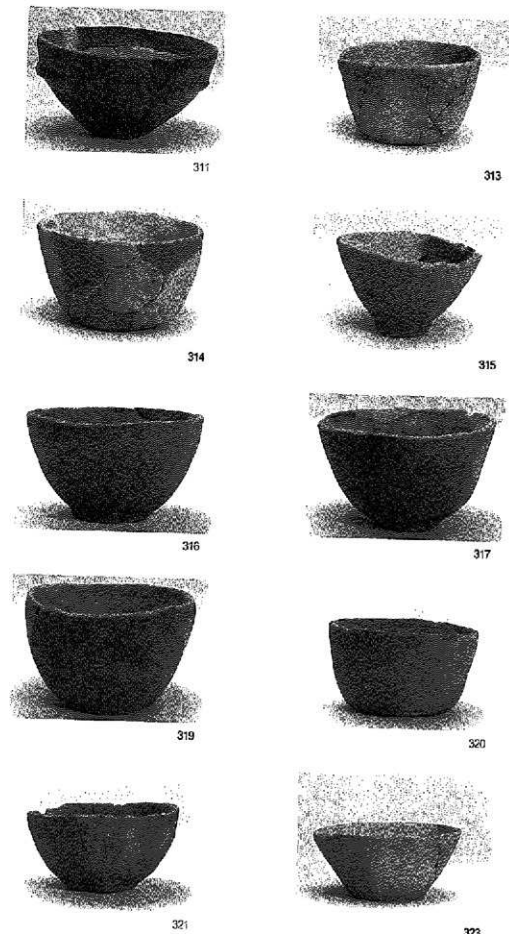


302

後ヶ迫遺跡出土遺物(33) 壺・壺・鉢 (第III地点)



後ヶ迫遺跡出土遺物(34) 鉢 (第Ⅲ地点)



後ヶ迫遺跡出土遺物(35) 鉢 (第Ⅲ地点)





324



325



326



327



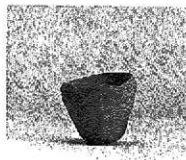
329



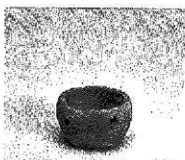
331



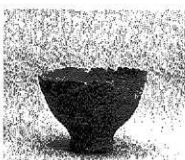
332



333



334

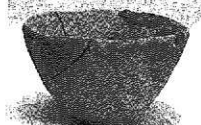


336

後ヶ迫遺跡出土遺物(36) 鉢・高坏・埴・ミニチュア・その他の土器 (第III地点)



337



338



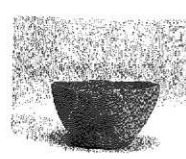
339



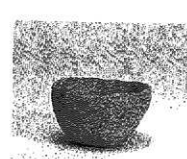
340



341



342



343



344



345

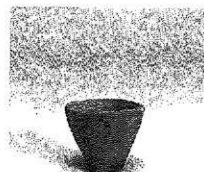


346

後ヶ迫遺跡出土遺物(37) 鉢・ミニチュア・須恵器 (第IV地点)



347



348



349



350

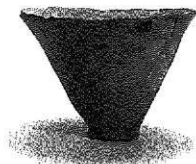


352



353

後ヶ迫遺跡出土遺物(38) 甕 (第IV地点)



359



360



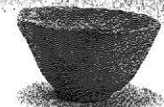
361



362



363



364

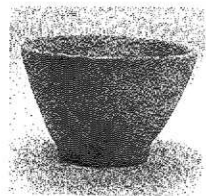


365



366

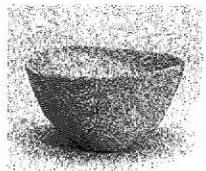
後ヶ迫遺跡出土遺物(39) 鉢 (第IV地点)



367



368



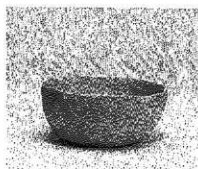
369



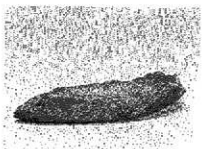
370



371



372



373



374

後ヶ迫遺跡出土遺物(40) 鉢 (第IV地点)



404



405



406



407



408



409



410



413



414



415



418

後ヶ迫遺跡出土遺物(41) ミニチュア (第IV地点)

垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(3)  
県営農免道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

## 後ヶ迫 A 遺跡

発行 1999年3月  
編集 垂水市教育委員会  
鹿児島県垂水市旭町61  
☎(0994)32-0224  
印刷 株式会社 トライ社  
鹿児島市南林寺町12-6  
☎(099)226-0815

'99.12. 8